



大学から
文化力
POWER OF
CULTURE

関東学院大学
ScMAL
Sagami Bay and Miura Peninsula Art Link

発行:関東学院大学
相模湾・三浦半島アートリンクプロジェクト
201603

BOOK 2015

ScMAL
Sagami Bay and Miura Peninsula Art Link

相模湾・三浦半島アートリンクとは？

相模湾・三浦半島アートリンク (SaMAL = Sagami Bay and Miura Peninsula Art Link) とは、相模湾・三浦半島エリアにおいて活動する地域発住民主体のアートプロジェクトやアート関連団体を連携させ、相互に協力するネットワークを構築しようとするものです。それぞれの団体の問題解決力、情報発信力、マネジメント力を高め、地域での活動をより深化させることを目指して、2015年に始まったプロジェクトです。





大磯芸術祭

名称 大磯芸術祭

運営 大磯芸術祭実行委員会

代表 杉崎行恭

2015年度開催期間 4月25日～5月9日

来場動員数 *データなし

2015年度の概要

[一般参加者による企画]

11企画



JR東海道線大磯駅の西に隣接する1km圏内を中心に、西端は駅より2.5km程度。海岸線より1km以内 東西2.5km×南北1km圏



「自宅をアート空間にする」目的で住宅の庭でライブと写真作品の展示を行なった「凸凹堂」。新たなコミュニケーションの場所をつくり出した

大磯芸術祭の特徴は？

芸術祭で町を少しずつシャッフル

大磯芸術祭の始まりは、大磯のグループが葉山芸術祭に参加するかたちで、2010年に「葉山芸術祭・大磯会場」として出展を始めたのがきっかけだ。その後、2011年に大磯芸術祭として独立。2015年までは、企画者が参加料を負担し、期間内に町内各所で展示・パフォーマンス活動を行なう葉山芸術祭のスタイルを踏襲しており、時期

も葉山芸術祭とリンクするように、ゴールデンウィーク前后に開催してきた。

初年度2011年の企画参加展数は11企画だが、各会場でいくつかの展示やパフォーマンスを行なっており、トータルでは40~50の企画が会期中に行なわれている。

参加出展者は、大磯町内のいくつかの飲食店等がハブとなり1カ所で複数の作家が出展しているパターンが多い。これらの店は、通常から作家の作品展示の場所として機能し、芸術祭に際して、店から作家に声をかけ展示を集



大磯町の名所のひとつで、日本三大俳諧道場のひとつに数えられる鳴立庵を使って、古代のサウンドを再現する『縄文笛』の演奏家がライブを行なった



カフェを利用して講師を招き、詩と文学の朗読会を開催。言葉のもつたらしさと魅力を再確認する試み



町内の前衛アーティストの自宅を芸術祭期間中に開放、古民家にアバンギャルドな作品が展開された



小規模ながらも町にアートのある時間と空間を生み出してきた大磯芸術祭。今後はスタイルを改めて活動する予定

める形で出展している。また、クラシック、ポップスを問わず音楽ライブが多いのも大磯芸術祭の特徴。

過去5回の開催で、出展数は大きく変わっていない。他の芸術祭に比べて、小さなエリアでのんびり開催している大磯芸術祭は、「夏のひととき居心地の良い空間をつくりだすこと。通常では起こらないコミュニケーションの場になれば」というのが主な目的。アートプロジェクトにしばしば付随する「地域おこし」のために自治体と連携するようなイベントではない、というのが実行委員の心情で、第

4回(2014年)の「マ・チ・ネ・カ・シ」というタイトルと、そのタイトルに付随したコピー「なんとなく、世の中をいっぺんにかえてしまえ！」といった空気に「ななめ横から、水をかけちゃえ まあ、そんなところかな」がそれをよく表している。現在、大磯町内では、別の団体が平行して、比較的近似の企画を行なっていることから、今後の方向性検討のため、2016年以降は時期と形態を変えての開催を検討している。

2010 葉山芸術祭の一部として



2010年は「葉山芸術祭」の「大磯エリア」として参加、このときは葉山芸術祭(HAF)のバナーを掲げ8企画が参加。大磯での住民主体で芸術を外に向けて表現するスタイルの初めての試みだった

2011 東日本大震災の直後に独立立ち



大磯芸術祭として独立した2011年。直前に東日本大震災に見舞われ、開催 자체も危ぶまれながらもスタート。独自バナーの製作や大磯での独自色をどう打ち出すか模索しながらの開催であった。このときから音楽や料理、クラフトもアートとし、「だれでも表現できる」楽しさを知つてもらうことが芸術祭の目的になった

2012 コピーライティングの妙を發揮



第2回からは各回毎にテーマを決め、その年の方向性を出す試みを開始。2012年の「町内★旅行」では山林やツリーハウスを持つ施設「海のみえる森」とも連携して、来場者に街を歩いてもらう試みを行なう。また、各所で偶発的なライブや手まわし蓄音機の演奏、屋外展示のインスタレーションも企画した

2014 屋外でのインスタレーションやライブなどの試みも



第3回と第4回はそれぞれ、「ワンドア★フォトグラフ」と「マ・チ・ネ・カ・シ」がテーマ。少しづつ内容を変化させつつ実行委員の想いをテーマに託して発信した

過去のポスター



大磯エリアの催し
葉山芸術祭傘下の2010年のポスター
はイラストと展示情報のみ



町内★旅行
第3回(2012)は大磯の町の印象としては意外感のある、「海」ではない「裏山」の風景をメインに



ART BEAT EAT
第5回(2015)はアートも音楽も食べる
ことも、全部芸術というメッセージを
韻を踏みながら発信

実行委員に聞く



大磯芸術祭実行委員会 代表
杉崎行恭さん

Q. 大磯芸術祭は毎回のテーマ設定が魅力です。

どんな気分で運営していますか?

A. まちおこしの発想はないですし、行政と積極的に繋がっていこうとう考えもないです。芸術祭を行なうことで、コミュニケーションの場ができれば面白いということですね。大磯にも芸術が好きな人はいるけれど、通常、それを話題にすることもない。家の中に作品がしまってあるけれど、それを表にして見たら、どうなるかという実験でしょうか。

Q. 町のなかではどんな反響がありましたか?

A. 最初は怪訝な顔をされる方もいました。クラシックなアートが好きでコンサバティブな考え方の方もいらっしゃるので、写真を屋外に展示したら「写真は外に飾るものではない」と叱られたり(笑)

Q. 町内のお店で展覧会が行なわれていますね

A. 参加するお店のオーナーさんはここ10年位で移住して来た人が多く、アートやクラフトが好きな人が多くて、そういったお店が表現者の拠点になっています。そういう意味では、お店と作品は地元に根付いている。店単位の小さなアートフェスティバルをとりまとめるのが芸術祭になっているかもしれません。

Q. 今後はどんな展開を考えていますか?

A. 無理に大きくしようとはしていません。また芸術祭をするのに目的を掲げるのも気が重いですね。大磯には個性的な面白い人がいるけれど、みんなが繋がっているわけでもなく、でもいろいろなグループが存在している。今後、そういう人たちと繋がりをつくることで、何が起こるか様子を見ていきたい。そして今まで参加してくれたアーティストをいかに大切にしていけるかを考えたいので、2016年以降はこれまでのフォーマットを外して、新しい形を検討中です。

運営スタイル



実行委員会 5~7人

参加企画への対応 HPおよびポスター制作 パンフレット制作 会計

発足以来の5~7人の有志による実行委員会で運営。意思決定は委員長以下の合議制で。上記4つの業務については実行委員会内で担当を決めているが、人数が少ないのでひとりが複数の業務を兼務したり、それでも手が回らない場合には、各実行委員が遊軍的に業務の補佐をしている。

予算



自治体他の助成金等は一切なく、参加費と個人からの協賛金で賄っているが、協賛金に頼らない予算組を目指している。

名称 金沢文庫芸術祭

代表 浅葉 磬 2015年度開催期間 9月20日～11月8日

来場動員数 1DAYイベント 約22,000人、街角アートラリー 約3,000人

2015年度の概要

[1DAYイベント]

- アートストリート（出展者によるマーケット）63店舗
- わくわくワークショップ（出展者によるワークショップ）21組
- ワールドステージ（近隣の教室等によるダンスやパフォーマンス）18団体
- Beeステージ（ダンスやパフォーマンス）12弾田尾
- 先住民俗&虹の翼広場 12展示+13イベント
- お祭りフード広場 30屋台

[街角アートラリー]

- 期間中13カ所で展示やワークショップが14企画



「1DAYイベント」は横浜市金沢区の「海の公園」で開催。「街角アートラリー」は京浜急行線に沿って、京急富岡駅から金沢八景駅の周辺までの南北5km、東西2kmのエリア



子どもたちの「なにかやりたい！」という言葉から始まった「虹の翼隊」は金沢文庫芸術祭の目玉のひとつ。子どもたち自身が企画した演劇のための自作衣装が会場を彩る

金沢文庫芸術祭の特徴は？

子どもの未来を見つめ、明るく盛り上がる秋のフェスティバル

金沢文庫芸術祭は、2015年の開催で第17回を迎え、SaMAL参加のアートプロジェクトのなかでは葉山芸術祭に次ぐ歴史をもつ。そのスタートは、創設メンバーでチーフプロデューサーの浅葉和子氏が葉山芸術祭に参加し、以来、同じ地域に住む何人かの友人と「珈琲をのみながら、称名寺境内でやれたらいいねという話」になったことから。横

浜市金沢区にある称名寺は鎌倉時代、北条実時が屋敷内に建てた持仏堂を起源とする名刹。現在は住宅街に囲まれているが、大きな山門から桜並木、金堂、庭園、その背後には緩やかな丘が続き、地元の人の憩いの場所。その称名寺での1日のイベントを皮切りに、近隣エリア内での応募による出展を「アートラリー」と名付けて、関連のイベントとともに「称名寺芸術祭」とし、スタートした。その後、1日開催のイベント（現在は「1DAYイベント」と名付けられている）の開催場所が、称名寺から離れたことによ



ウォールペイントアーティスト・ロコサトシによるライブペインティング

金沢文庫芸術祭では、毎回、アイヌ、アフリカ、中南米等の先住民族の文化が紹介される。ネパール、ガテマラなど馴染みのない地域の話を聞くレポートなども開催



世界各地の民俗音楽を奏でるバンドやパフォーマー、紙芝居など、観て楽しむだけでなく、観客もいっしょに踊れるライブが開催される



り、第5回（2003）以降、名称は金沢文庫芸術祭となった。

第6回（2004）以降、1DAYイベントは海際にある「海の公園」内のおよそ4万m²の範囲で、9月中旬の開催が恒例となっている。

当初より、メンバーのなかでは、芸術祭を通じて「次の世代ににかを伝えたい」という想いがあったという。2008年以降は、「子どもの未来は地球の未来」というテーマを掲げ、子どもたちがパフォーマンスをしたり、遊んだり、身体全体を使って表現できるイベントが、公園のあちらこちらで

展開され、大人たちも誘発されるように、音楽とダンス、ワークショップを楽しんでいる。

さらに近隣エリアで2カ月間開催されている「アートラリー」でもユニークな趣味をもつ人たちの展覧会やワークショップが開催されており、全体規模としてはのべ2万5千人を動員する金沢区での一大イベントだ。

この大きなイベントを支えるのは、年間を通して準備に携わっている20人程度のボランティアメンバー。1DAYイベント当日には100名近いスタッフが集まるという。

1999 称名寺芸術祭としてスタート



第1回（1999）から第4回までは称名寺境内での開催。周辺を住宅に囲まれ、駅名の由来ともなっている「金沢文庫」がある古刹での芸術祭。のんびりとしつつも格調高い空気感があった

2009「子どもの未来は地球の未来」をスローガンに



第5回（2003）には開催地を八景島へ、翌年は海の公園へと移動。名称も金沢文庫芸術祭と変わった。第11回（2009）、毎年変わっていたテーマを前年と同じ「子どもの未来は～」とし、以来この言葉は芸術祭のスローガンとなる

2015 1DAYイベントは2万人超え！



海の公園での1DAYイベントはすっかり地域にも定着し、年々来場者数が増加。子どもを連れたファミリー層の来場が増え、2万人以上の人を集めるビックイベントになった

2015 時の流れとともに質的变化も



1DAYイベントは盛り上がり、横浜市からの継続的な助成金など追い風もあるが、地域の会場で開催される「街角アートラリー」出展者の高齢化＆減少など気になる変化も…

ポスターの変遷



世紀を超えて、あなたの声が聞きたい
第2回のポスター。称名寺の仁王門と太鼓橋を描いたイラストがこの後も芸術祭の象徴に



心の花をさかせよう
第7回のポスターは、チューリップがカラージュされた。意気込みがスローになった時期に「ふと開いた百科事典の頁にあった花」に惹かれたことから



こどもの未来は地球の未来
恒例イベントとなっている現在、ポスターの使命は情報を分かりやすく伝達すること

実行委員に聞く



金沢文庫芸術祭
チーフプロデューサー
浅葉和子さん

Q. スタートはどんな風に始まったのですか？

A. 私は90年代にアメリカでネイティブインディアンの教えを受ける機会があつて、帰国後、その哲学を伝えたくて、ドリームキャッチャーなどをつくるワークショップを葉山芸術祭で開催していました。その自由な雰囲気がとても心地よくて、近所の人とおしゃべりしているなかで、横浜市大の教授だった方が、芸術祭をすることで、地域に新しい風を吹き込む、というレクチャーをして下さったことがあったのです。2年間の研究期間を経て立ち上げました。

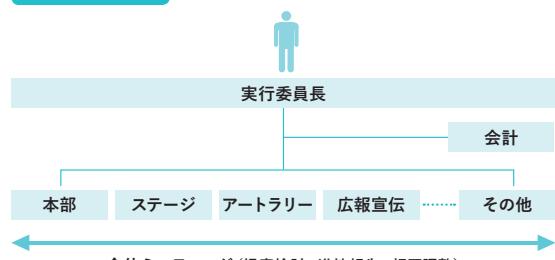
Q. 途中から子どもにフォーカスした内容になりましたね

A. 私自身が子育てを終えた後、あることをキッカケに、子どもの育つ環境を真剣に考えなくてはいけないと思い始めて、子どもを対象にした造形教室を始めました。そのこともあって、子どもたちが企画を考えて、パフォーマンスする発表の場にもなっていますね。そして、その保護者の方や教室を卒業した人が運営を手伝ってくれるようになっています。子どもにとっては、しっかり考えて実践することができる機会ですし、スタッフとして手伝ってくれる人にとっても、自己実現の重要な場になっているのかな。私はそういう若い子たちが、未来の地球を救ってくれると思っています。

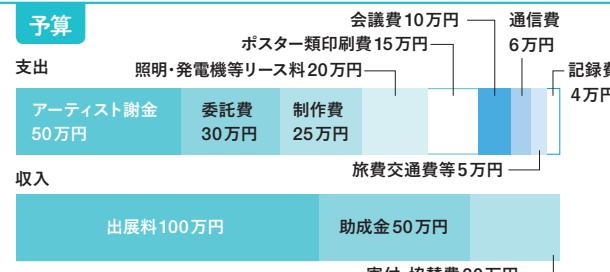
Q. 課題はありますか？

A. たくさんの人が熱意をもって運営をしてくれています。そうなってくると、「自己実現が大切なだから、余計な予算をかけないでみんなが参加しやすいように」という意見や「一定レベルの表現者がいて自分も成長できた。経費がかかってもプロのアーティストを」といった、対立するアイデアも出てきています。過去の形式通りじゃなく、位置づけや目指すところを考える時期に来ているのかもしれません。また、海の公園が会場になることにより、地域性が薄まっているような感じもあり、地元の人ともっと一緒にやっていける雰囲気をつくりたいですね。

運営スタイル



実行委員長の元に、当日の担当エリアごとのチームがフラットに並んだ組織構成をとる。各チームの制作進行に関わる意思決定はリーダーを中心各チームに任せられ、新たな企画提案やチーム間調整など全体に関わる話し合いや進捗報告のシェアが毎月の全体ミーティングやマーリングリストで話し合われている。毎月のミーティングに出るメンバーは20～30人程度。イベント当日は100名近いスタッフが集まる。



収入の助成金は横浜アートサイト（横浜市芸術文化振興財団）から。寄付は個人と地元企業からの協賛

名称 逗子アートフェスティバル	略称 ZAF
運営 逗子アートフェスティバル実行委員会	代表 渡邊忠貴
2015年度開催期間 10月1日～11月30日	来場動員数 約43,000人

2015年度の概要

35展示、29イベント

[一般参加者による企画]

市民企画 32企画

[他団体・機関との共催イベント]

●第65回逗子市文化祭

(俳句、舞踊、美術等、趣味の会や同好会、教室などの展示、公演、参加型イベントなど)

●文化プラザホール連携企画 2企画

●提携企画 3企画



逗子湾南端からJR逗子駅北側までの南北1.5km
逗子湾から京急線新逗子駅までの東西1kmで囲まれた「まちなかエリア」および
田越川周辺、東逗子駅周辺、小坪地区、逗子海岸など



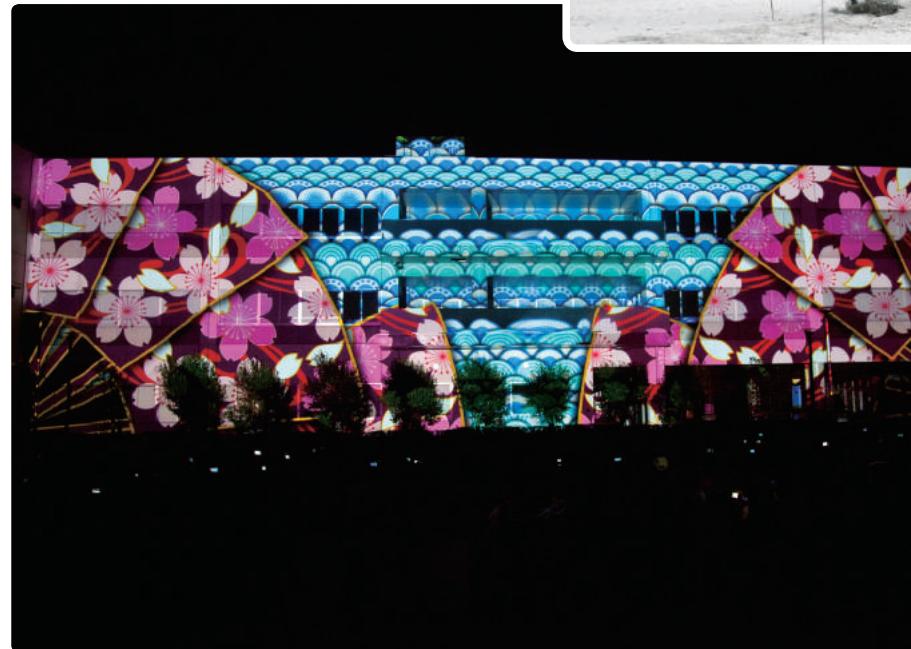
2015年に開催された、逗子文化プラザホールとの連携企画「～逗子の魅力全開!踊ろう!ダンスでつなぐ逗子のまち～映像完成披露会 with コンドルズメンバー」



20年以上に渡り開催されている「逗子海岸・流鏑馬」等の人気イベントとの提携でアートフェスティバルへの人の流れをつくる



2014年、初の本格開催では「逗子アートサイト」として美術作家の作品が逗子市内の各地に設置された。
写真はオープニングイベントの松村忠寿「フキダシプロジェクト」



2014年の開催で、メディアアーツ逗子が開催した「プロジェクトマッピング」。メディアアーツ逗子がそれまでも独自に例年開催したイベントも、逗子アートフェスティバルの大きな目玉に

逗子アートフェスティバルの特徴は?

市のバックアップで
地域の文化イベントを結集

2013年に「プレ・アートフェスティバル」としてスタート。2014年度から「逗子アートフェスティバル」となり、以降、毎年開催されるが、2014年を皮切りに、3年毎に規模を拡大するトリエンナーレ方式による開催を予定している。逗子アートフェスティバルは、そのスタートに逗子市が大きく関与している。逗子市は2011年、文化振興基本計

画において「地域の文化を市民の手で拓く」を掲げ、アートフェスティバルの開催を決定。市の呼びかけにより、市民が運営する実行委員会が立ち上げられ、その活動が始まった形だ。その環境の下、実行委員会が企画を募集し、市民の自主的な展示やイベントを盛り上げる「市民企画」はもとより、アートフェスティバル以前より有志グループが逗子で開催してきた「メディアアートフェスティバル」(現在は「メディアアーツ逗子」と改称)と連携、逗子市が運営する文化施設「逗子文化プラザ」主催の公演やイベント、さらに書道・

生け花などの文化サークルの合同発表会である「逗子市文化祭」もその傘下で開催する。また、2015年で第24回目となる逗子海岸での「流鏑馬」や、街なかでのイルミネーションイベントなど、市の経済観光課や逗子市観光協会、逗子市商工会が企画してきた人気のイベントとも連携しており、逗子市で存在する新旧の文化イベント全般を網羅するフェスティバルになっている。本格開催初年の2014年は山重徹夫氏をアートディレクターとして迎え、逗子の街の5カ所に22の招待作家の作品

が設置される「逗子アートサイト」を実施。その他にも、オーケストラの演奏と映像作家がコラボレーションするコンサートなど、意欲的なイベントが展開された。スタート間もない逗子アートフェスティバルだが、多種多様なコンテンツを含んだ大掛かりな事業を、財源や運営の面でも、逗子市と二人三脚で進ませているプロジェクトだ。市民が自治体といかに協働してアートプロジェクトを盛り上げていけるかの実例が今後、展開されていくだろう。

History of 逗子アートフェスティバル

2013 プレ開催に向けて実行委員会スタート



逗子市が制定した逗子市文化振興基本計画にのっとり「地域文化の創造を象徴する事業」として開催が決定したZAF。2013年に実行委員会が組織化されて以来、急ピッチで2013年の「プレ・アートフェスティバル」の準備が始まる。広報企画部会の実行委員会が会議中

2013 既存の企画も傘下にスタート



2013年に「プレ・アートフェスティバル」を開催。初年度は助走の年として、翌年の本格的な開催を見据えながら、既存のイベントや、文化事業を集めて開催。35カ所で29イベントが開催され、4万6千人の参加者を集めた。写真是オープニングイベントとして開催された平田オリザ氏のアンドロイド演劇「さようなら」

2014 独自企画を盛り込んだ本格的なスタート



本格的始動の2014年、中之条ビエンナーレを手がける山重徹夫氏をディレクターに迎え「逗子アートサイト」を開催。この年はメディアアートフェスティバルの映像作家が文化プラザ企画の公演に参加するなど、縦割りの企画のなかでも行き来がなされるようになった

2015 集客は飛躍的増加



2015年度は前年の大規模開催から、通常の規模に戻しての開催。しかし、初年度より続けられている公募の「市民企画」は前年の26企画から、32企画へと数も増え、恒例のイベントとして市民の間に定着し始めている。写真是2年連続開催の人気企画「逗子ヤーンボンバーズ東逗子駅前毛糸化計画」

市民ボランティアが案内役で活躍



会期前の研修では……

各地に点在する会場のため、駅前で案内をするボランティアスタッフが必要不可欠。会期前にボランティアが集まって作っているのは…



手作業で完成!

ステンシルでロゴをプリントした布バッグ。「11月開催でスタッフTシャツでは寒い、かといってジャケットをつくる予算ではなく苦肉の策…」(実行委員)のバッグだったが、パンフレット配布に活躍するツールに



テントのデコレーションにも

ステンシルワークは駅前のボランティアテントのデコレーションにも使われた。制作のためにボランティアが事前に集まり共同作業するのも、繋がりづくりに良い効果があった

実行委員に聞く



逗子アートフェスティバル
実行委員会 代表
渡邊忠貴さん

Q. 2015年までの3回の逗子アートフェスティバルを終えていかがですか?

A. 2013年、14年は実行委員会が立ち上がって、企画もノウハウも無いなかで、がむしゃらに走った感じです。終わった2015年、次の16年とともにビエンナーレの隙間の年で体制を固める年、身の丈にあった内容で着実に進め、17年の大きなイベント準備を進めていきたい。課題はたくさんありますから。

Q. どのような課題がありますか?

A. 2014年の「逗子アートサイト」では、市内5カ所の会場に作品を設置しました。逗子には、余っている施設や空き家等がなく、生きた場所を借りる形になるので、権利、インフラ設備の使用等、すべて交渉が必要です。海岸も県の土木の部署の管理だし、警察や消防との調整が必要なこともあります。われわれ民間だけでは、難しいので行政のサポートは重要です。アーティストが滞在制作するにも、アーティストインレジデンスに使えるような施設が必要なので、現在、考えています。

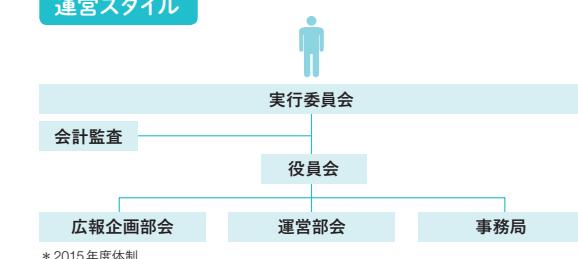
Q. 行政の存在感が大きいですが、参加者であり、鑑賞者である市民との関係は?

A. 「市民企画」は年を経るごとに盛り上がっていきます。もともと逗子には鑑賞眼の高い人が沢山住んでいて、市民企画のコンサートや美術展もレベルが高いと思いますし、皆さん「自分たちでやる」という意識が強いです。お母さん同士のコミュニティがアートを媒介に集まる展覧会があったり、米軍施設もあるので日米市民交流を長年続けられている方がワークショップをされたり、逗子らしいユニークな企画もあります。

Q. アートフェスティバルのボランティアも「ずしこンシェルジュ」と名付けていますね。

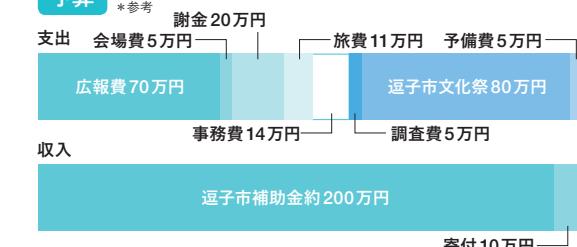
A. ボランティアで参加される方の意識がとても高く、自らできることを考えて行動してくださる方が集まっている。アートフェスティバルのボランティアとして駅前に立っているとアートフェスティバル以外の、逗子の名所旧跡のことを尋ねられたりすることが多いということで、今後は、ボランティアというより「観光大使」として、アートフェスティバルを超えて逗子を紹介できる存在になっていただきたい、研修の機会をつくろうとしています。

運営スタイル



企画運営主体である実行委員会は、公募市民、市内関係団体から推薦された市民13名に市役所職員1名が加わり、合計14名で構成されており、事務局の機能は逗子市の文化スポーツ課が担当。実行委員会にはフェスティバルの骨格や予算の策定、企画の募集および決定だけでなく、広報活動(企画・広報)と運営(会場運営、ボランティア募集、管理)の機能的領域があり、各領域の下に実行委員会メンバーが配置される。市民企画の参加者にも呼びかけ、アートフェスティバルの制作活動に参加してもらっている

予算



逗子市の負担金が予算の中心である催しのため、逗子市の予算は会場費、広報宣伝費に主として当てられ、ZAFの中心をなす市民が独自に企画し主催するアートイベント(市民参加)は独立採算で参加してもらっている。観光大使としての役割を担うボランティアには交通費を支給。「今後、逗子市からの助成が少なくなっていくことが予想されるので、寄付をしてくれる市民サポーターを探したい。地元の逗子だけではなく、都心や可能なら海外へも拡げていきたい」(渡邊氏)。

名称 葉山芸術祭	略称 HAF
運営 葉山芸術祭実行委員会	代表 合議制であるため代表は置いていない
2015年度開催期間 4月25日～5月1日	来場動員数 約30,000人

2015年度の概要

[葉山芸術祭]

- 2日間にわたり森戸神社でのイベント
(ライブ、ワークショップ等:6イベント、青空アート市:13出店、屋台村:10屋台)
- 「Life is beautiful! モザンビークとアート」企画展
- HAFデッサン講座
- Hその他「共催」3企画、「協力」4企画

[一般参加者による企画]

102企画



葉山芸術祭の中心地となるのが葉山一色地区にある森山神社の境内での青空マーケット。境内にある「一色会館」は舞台の役割も果たし、ライブイベント等も行なわれる

葉山芸術祭の特徴は?
23年の歴史と最大の出展数を擁する先駆的芸術祭

葉山芸術祭は2015年の開催で、第23回を数え、SaMALの6団体のいくつかの団体も、葉山での開催をきっかけにその後、独立していくなど、先駆的な存在感をもつ。

葉山には明治期に御用邸が建設され、財界人や皇族が別荘を置き、日本画家山口蓬春はじめ芸術家がアトリエを構えたこともあり、芸術をつくる人、鑑賞する人が多いエ

リアだ。戦後、「一葉会」という、民間の文化振興団体が存在し、時を経て、その一葉会への憧憬を抱く人たちが同名の会を興し、1993年葉山芸術祭をスタートさせる。第1回はウィーンフィルハーモニーの主要奏者による五重奏管弦楽や、箏曲家の故・宮城道雄の別荘で門人らによる箏曲演奏会、現代詩の田村隆一が自作の詩を朗読する会が開催されるなど、芸術の本流を行く内容の、公演の集積型の芸術祭だった。

その後、第4回目から、実行委員のメンバーが交替し、



葉山町を中心とした広いエリアの各所で、店先、自宅などを会場にしたさまざまな作品展が開催される(2012年の参加企画)



2015年主催企画のデッサン講座。美術教育機関のない葉山で美術を学ぶために芸術祭が特別開講



モザンビークの美術作家の作品を展示。会場は建築家吉坂正隆設計の住宅の一室(p30-37参照)



屋外で写真を展示する試み。自分の釣り船置き場で釣った魚の写真を並べる写真家の展示

それにともない葉山芸術祭の現在のスタイルである、「参加者=発表者が、参加費を払って展示やイベントを行なう」参加型芸術祭へと変化した。現在の葉山芸術祭は、場所柄、海や里山の風景に馴染み、かつ都会的な要素も含む、デザイン、クラフト、アートの中間領域で生活の延長線上にある、雑貨、アクセサリー、ファッショն、インテリア、建築、写真、音楽、食など生活に根ざした「生活芸術」の展示やイベントが目立つ。ショップ・自宅・アトリエといったプライベートな場所を会場とするスタイルも葉山芸術

祭が先駆けで、自由で気楽な雰囲気を生んでいる。実行委員会はそれとはバランスをとるように、美術展やデッサン教室、コンサート、また大掛かりなイベントを主催企画として行ない、近隣の県立美術館別館や地域の施設との協力企画を行なう。中心地の森山神社で行なわれるオープニングイベントやマーケットは葉山内外からやって来る多くの人で賑わう。気候のよい葉山が、もっとも心地良いGWの時期に開催される地域の風物詩のような存在だ。

1993 最初は「本当に芸術祭」



第1回(1993)開催の発起団体は、葉山を活動拠点とした文化活動団体「一葉会」が始めた芸術イベントで、コンサートや展覧会が主体だった。東京や横浜で行なわれていたアカデミックな芸術を、葉山でも鑑賞、体験できる機会をつくろうという目的だった

1995 住民の展示の集合体へ



第3回(1995)～第4回(1996)にかけて、実行委員が大幅に入れ替わったことにより、運営の方向性が大きく転換、主催者側の企画主体の芸術祭から、地域住民が展覧会をつくり発信するイベントの集合体に変わった。自宅や事務所を、「オープンハウス」として展示会場にし、出展する形式の展示が早くも登場

1997 関心によって展示内容も変遷



第5回(1997)頃より展示にワークショップ形式が増加、来場者参加型イベントが増えた。展示内容も、美術や音楽といった「ハイアート」から、手工芸やクラフト作品を出品する出展者が増えるなどの転換が起り、第10回(2002)頃より「ヒーリング」系、第13回(2005)頃より「食」に関する出展が増加するなど、展示の内容も変化していく

2015 パンフレット有償化等、体制も変化へ



第15回(2007)より、葉山の飲食店やショップが参加費を払って葉山芸術祭のプロモーションを担い手として参加する「サポートショップ」が出現。配布量の増加に伴い第20回(2010)より有償化されたパンフレットの販売を担っている

パンフレットの変遷



「パンフレットはいろいろやってみた」シリーズ
第5回(1997)はハンディなA5版サイズの蛇腹折り。この年はイベント数が33。スケジュール、地図、コンテンツがきれいにまとまっている



普通にA4版、全8ページ
第8回(2000)はA4冊子に森山神社青空アート市の別紙の投げ込みがはいって、ややボリュームアップ。イベント数は41



参加数を100を超えると……
第21回(2013)は無料のA2版フライヤー(写真)と有料の冊子の二段構え。イベント数が100を超え、エリアも横須賀から鎌倉まで拡大し、大紙面で地域をカバー



冊子版に一本化100円
最新の第23回(2015)はA4版で全32ページ、有料版のみ。イベント数は2010年頃をピークに減少気味でこの年は113。とはいえ膨大な情報量だがそのレイアウトには「こなれ感」がある

実行委員に聞く



葉山芸術祭実行委員
朝山正和さん

Q. 葉山芸術祭のスタート当初のことを教えてください。

A. 葉山にはいくつもの文化サークルが存在しましたが、当時はネットもなく、情報も伝わらず、分断されていた。その繋がりをつくれないかと、一葉会の皆さんと一緒に手伝うようになりました。しかし、当初の運営スタイルは、情熱はあるのだけれど資金的に無理のある形で持続可能性がなかった。そこで実行委員会はオーガナイザーに徹する現在の形に変えてきました。

Q. 目的は?

A. アートによる地縁づくり。移住してきたアーティスト発で新しいコミュニティができる、それがまた次のアーティストが訪れる機会になる。そして葉山の文化的土壌は厚くなっています。

Q. スタートして間もなく四半世紀ですね、苦労されたことは?

A. お手本もなくて、不安だったし、ずいぶん回り道もしました。葉山芸術祭という名前もプレッシャーだった。「葉山」を代表しているようだし、「芸術」ってなに? 芸術で「祭」って? と考えました。ミッションとかコンセプトも突きつけられていたし、いっそ名前を変えてしまえ、と思った時もあったけれど、いまは「葉山芸術祭」という一塊の言葉として飲み込めています。芸術じゃなくて、葉山芸術でそして祭なんだから(笑)

Q. 完成した感じのスタイルですが、今後どうされますか?

A. 世代交替の時期だと思いますが、自分たち実行委員会がもってきたバトンそのまま渡せば良いとは思っていません。世代が替わることで、質的変化が起これば良いと思っています。変えていってほしい。そして、自分たちも一緒にやっていきたい。これからの変化が楽しみです。

運営スタイル



全体方針決定 企画 調整 予算 広報 募集 調査 主催事業 会計

森山神社実行委員会(HAF兼任3名+守山の実行委員会3名 計6名)

葉山芸術祭調査研究プロジェクト(HAF兼任1名+3名 計4名)

実行委員は自薦および、関係者の推薦で、継年に任務にあたり、任期等もない。「民主主義的であること」を重視し、「委員長」や「代表」の役職や肩書きも置かないのをルールとしており、実行委員会内では様々な問題について、常に議論の上で決定していく。また、これらの業務は完全なるボランティアであり、「頭だけを使う」役割については費用は発生しない。芸術祭にまつわる業務で、広報物制作、警備、など「手間と時間を要する業務」については、事業費予算の費用をもって業務を他の人に委託している。

予算

支出	活動経費20万円	
パンフレット等 110万円	事業費 55万円	他
収入		
参加費 110万円	町補助金 30万円	他
寄付 20万円	事業収入 18万円	

参加型の芸術祭である現在、主たる収入は出展者とサポートショップからの参加費。また、パンフレットに名前を掲載する「寄付」や事業収入がある。葉山町からの補助金は全体予算の12%ほど。「町を盛り上げるイベントではあるが、町の政治や誰かの政策の片棒を担ぐものではなく、あくまでも、自分たちのための、自分たちでやるイベント」であることをモットーとしている。

名称 真鶴まちなーれ	運営 真鶴まちなーれ実行委員会 代表 ト部美穂子(実行委員長)、平井宏典(ディレクター)
2015年度開催期間 2016年3月5日~3月27日	来場動員数 推計4,000人
2015年度の概要	

【企画】

- 現代アートの町中展示 7組のアーティストによる約15点の作品展示
- まちなーれArTreasure Walk スタッフの案内でアートと町を巡るガイドツアー
- イベント、ワークショップ、ライブ、パフォーマンス、研究発表など、約30企画



阿部乳坊「漁師の黄色い網干し場」(2014)
真鶴らしい港を見下ろす傾斜地に人々が建ち並ぶなか、ぽつかりとできた空き地につくられている



葛谷允宏「超ひもの理論」(2014)
食のアーティストである葛谷氏がまちなーれのために制作した作品。「干物」は真鶴の名産品である



葛谷允宏「超ひもの理論」(2014)
食のアーティストである葛谷氏がまちなーれのために制作した作品。「干物」は真鶴の名産品である



松下 徹「漂流物」(2014)
港に面した民家の壁面に描かれたペインティング。松下氏の作品は町内3カ所に点在し。細かく見ると、モチーフは貝や海に関するもの

伊藤隆治「真鶴の月」(2014・2016)
真鶴港のまさに岸壁に置かれた作品。しなる釣り竿の先端に球体が取り付けられた作品は風とともに動き、景色のなかに一体化する

真鶴まちなーれの特徴は?

美の街に置かれた
美術を楽しむ

2014年8月に第1回、2016年3月に第2回を開催している。地元出身者を中心とした有志のグループが実行委員会を結成。町内外の美術作家を招き、滞在制作した作品を町内に展示。同時にワークショップや町歩きやセミナー等のイベントが開催される。

真鶴は、源頼朝がこの地の人々に助けられ、苦境を脱し

て源氏再興へとむかったという逸話が『吾妻鏡』や『源平盛衰記』に残る場所。江戸期、海上輸送の便が良く、良質な小松石が採れしたことから、江戸城築城の際に石材を送り出し、また重なる大火により大量の木材が必要とされたことから、幕命によって木材確保の御用林が真鶴半島につくられた。そして、その人工林の養分が海に流れたことから真鶴近海は良質の漁場としても賑わったという。

現在、人口8,000人弱の静かな港町だが、湾を見下ろす斜面に入り組んだ坂道と人々を美しい石垣が飾り、点

在する小さな史跡の数々がかつて賑わいを想起させる。1984年、バブル期で乱開発に日本中の地方自治体が沸くなかで、真鶴町は小さく美しい景観を守るために「真鶴まちづくり条例」の一環として「美の基準」デザインコードを制定した。国内の自治体としては珍しいこの制度によって、威圧感のある建造物がつくられることはなく、ヒューマンスケールに連なる街並がいまも残っている。真鶴まちなーれは、その真鶴の魅力を発信することを命題とする実行委員会グループの熱意により運営されてい

る。芸術祭としての規模は小さいが、「気付き」や思考を伴う現代美術を小道の続く街のなかに置き、それを丁寧に見てもらいながら、街の魅力を発見し、作品の印象を深く心に残す試みがなされている。小さな町で地域住民への配慮もしつつ、作品制作をするアーティストへのケアもあり、実行委員会の働きかけでのワークショップ開催も多い。委員たちの仕事量は膨大だが、ボランティア含め最小限人員のチームは、結束力で乗り切っている。

2014 干物屋さんの店先に入る



2014年の第1回は、地元の人や場所を巻き込んだユニークなワークショップが企画された。「干物屋の店先学校」は、真鶴での随一の風情のある古民家の干物専門店「魚伝」を舞台に、イタリアンのシェフを招き、真鶴産の魚介を使った前菜とパスタのランチを味わうワークショップを開催。干物屋の若主人から魚の捌き方を習い、イタリア料理の専門家の料理実演を間近で見て、料理を味わう

2014 採石の現場にいく



真鶴は現存する石材産地として国内でもっとも古い歴史をもち、ここで採れる「小松石」は江戸城の石垣や、源頼朝や北条一族の墓石にも使われたといふ。通常、一般人が入ることができない採石の様子を見たり、石を磨いて作品づくりができる真鶴ならではの体験をプログラム化

2014 「美の基準」を知る



「莊厳な寺社仏閣もなく、伝統的な建造物が並ぶ訳でもない、でも美しい」、普段着の景観の良さを再確認した真鶴の「美の基準」。背戸道(家の裏の道)、少し見える庭、生きている屋外、地の生む材料、人の気配……かつて、日本の市井で大切にされ、現在、ないがしろにされている景観や暮らし方にまつわるデザインのキーワードを役場担当者の解説で聞く

2014 つまみ食い巡り



地元の酒屋の名物店主とともに、カップ酒を片手に商店街に散らばる逸品をつまみ喰いしながら歩ける企画。干物屋では七輪で焼いた干物を試食、魚の煮付けや、寿司屋でのしパフェ等、観光客がひとりで立ち寄るだけでは不可能なローカル店の魅力を、案内人とともに短時間で堪能できる

真鶴まちなーれでつくったもの



専用アプリ

真鶴まちなーれでは「ArTreasure Walk」というアートツアーが行なわれた。そのコンテンツを楽しむための専用アプリを開発。エリア内でアプリを起動するとアーティスト、作品、制作過程、町の情報などを受信できる



ポスター、SNSはぬかりなく

懐かしく、小さな美しい風景が連続する真鶴の風景を連想させるポスター。Facebook、Twitterも抜かり無く準備



旗のもとには情報が

「ArTreasure Walk」と名付けられたアートガイドツアーを、第2回(2016)は強化して開催。期間中、毎日開催し、このツアーに参加しないと鑑賞できない作品もある

実行委員に聞く



真鶴まちなーれ 総合ディレクター
平井宏典さん

Q. 町の魅力を発信するアートイベントということですが、大切にしていることはどんなことですか？

A. 単に現代美術の展示会をやるつもりではなく、作品ごとに真鶴の町の魅力をじっくりと味わって貰える機会になることが目的です。アーティストには、その目的や意図をしっかりと伝えたうえで表現してもらうことが大切で、その部分に細心の注意を払いました。また、町民の人達にも、滞在制作をするアーティストや楽しみにきた来場者にウェルカムな雰囲気で接してもらいたいということをお願いしてきました。

Q. 歴史ある港町の魅力を伝えるのに、なぜ現代美術が必要なのですか？

A. 現代美術で「心地よい裏切り」をしたいのです。町民は「美の基準」という言葉を知っているけれど、その基準って本当はなんなのだ？ と問いかけることも必要かと思うのです。確かに高層マンションは建たないで済んだけれど、高齢化や財政難など、よくある問題がここにもあります。美しく死んでいけば良いのか？ と言えば、そうではない。問題を抱えるなかで、美しい町のあり方を問うて、これからを模索したいということがあります。外向けには、アートプロジェクトチームの流れも利用しつつ、感度の高い層に向けて美の基準による真鶴町の美しさや生活の作法といった価値観を発信していきたい。

Q. 第2回目を開催し、初回とどんな違いがありましたか？

A. 初回に比べ、展示点数が少なくなり、実行委員の数も減りましたが、実行委員長は地元で子育て中の主婦だし、真鶴生まれ・真鶴育ちの大学生ふたりを中心に、より地元意識の強いメンバー構成になりました。作品が少なくなった分、ArTreasure Walkというガイドツアーを重視し、来てくれた人に丁寧に伝えることに注力しました。長い時間をかけて漁師や石工がつくりあげてきた独自の作法がある真鶴という大きな作品を、アートワークとともに内外に発信することができたと思います。

運営スタイル

実行委員長1人	総合ディレクター	実行委員2人	実行委員
地元の協賛金集め	アーティストの選定	地域の交流	ポスターやチラシの制作にともなうビジュアルイメージ形成
ワークショップ担当	滞在制作の進捗管理	情報発信(SNS等)	
町役場	展示場所の調整	会期中の現場対応	
地元との折衝等			
会計	ツアーア等の企画		

予算

支出	アーティスト経費・謝金 60万円	会場設営費 30万円	IT関連 5万円
広報 15万円			
収入			
SaMAL企画実践ケーススタディ助成 70万円			寄付や協賛金等 30万円
実行委員会内部留保 10万円			

上記は第2回開催への実施体制。第1回目は総合ディレクター2人、実行委員長のほかに実行委員が4人での開催であったが、第2回にあたり、地元メンバーを中心とした編成に変更となった。このことで、経験の浅い大学生も含まれたが、メンバーの地域密着度は高くなつたため、役場や地域の人との交流も強く、効率的にコミュニケーションをとりながら乗り切った。実際の会期は、10数名の大学生ボランティアがサポートした。

本来ならば、パスポート制やガイドツアーの有料化を行なったかったところだが、今回は助成金があったことにより、無料のツアーを開催。今後、アート作品を見る事に対して何らかの課金を発生させ、いちばん費用がかかる、アーティストや作品設置に関わる財源を安定的に確保したいところ。ワークショップについては「儲けを出さない」形の参加料の設定をワークショップ担当者にお願いした上で、有料ワークショップとしている。

名称	三崎開港祭
運営	三崎開港祭実行委員会
2015年度開催期間	11月10日～11月11日

来場動員数 約1,400人

2015年度の概要

【三浦開港祭独自企画】

- 芋煮ロックフェスティバル（8組のアーティストによるライブ）
- いーちゃん・イチャフェスティバル（沖縄の食と文化を紹介 沖縄からの飲食ブース、物品販売の出展および、音楽ライブ）

【参加者の出展イベント】

- 開港祭マーケット（三浦市内外の参加者によるフードや産直品のブースが並ぶマーケット）
- 手づくり作品市～みさき青空マーケット



2015年は三崎港の北にある圓照寺境内および港の中心部にある産直センター「うらり」の2カ所で計画（前年および初年度は三崎港を中心とした半径500m圏の数カ所に点在）



三崎港に近い圓照寺境内での「芋煮ロックフェスティバル」が第3回のメインイベント。木村充揮（豪歌団）、Saigenji、三崎の子どもたちによる「かもめ児童合唱団」らのアーティストが出演する有料ライブ

三崎開港祭の特徴は？

既存の市民活動を
束ねた祭

NPO法人と三浦市が行った市民活動促進事業「まちカルde生きがいにぎわい盛り上げタウン事業」として過去に開催されたイベントの一部分を継承する形で、2013年にスタート。2015年で第3回の開催。

「開港祭マーケット」は市内外の出展者によるフードや産直品のフリーマーケット、「手づくり作品市～みさき青空マーケット」

は公募で出展者を集めたクラフト作品のマーケット。第1回、第2回は上記の2イベントに加え地元作家の展示や、商店が開催するワークショップ、もともと地域で開催されていた有志のフリーマーケット等も三崎港周辺の商店街で開催されていた。第3回は、ロックフェスと沖縄の食と文化紹介のイベント等を中心地に近い圓照寺境内で開催。三崎開港祭は市民が中心になって行なう、さまざまな事業を「開港祭」としてひとつにまとめ、全体として発信力を高めようという試みだ。



三崎港の産直センター「うらり」の2階で開催された「手づくり作品市」の会場。たくさんの工芸愛好家が大きな会場に作品を持ち寄って展示販売。小さな手づくりワークショップコーナーも多数



「手づくり作品市」の1出展者のブース。「三浦で2匹の羊を育てて、毛を刈って、糸を紡いで、編み物をする」という驚きの“ワンストップ手づくり作家”がいた……



第2回（2014）の開港祭で開催されたライブペインティング。香川県から招かれた作家、柳生忠平氏が海南神社で絵を描き、神社に奉納するというイベント



三崎開港祭のシンボルとなるフラッグ。2015年開港祭は悪天候にたたられバタバタの移動も……

2000年代にはいり、三浦市にはクラフト作家やアーティストの移住が増えてきているという。現代美術やガラス工芸や截金（きりがね）細工の分野で実力を認められ、評価を得ている作家も存在し、若手クリエイターのシェア工房等も出現している。開港祭の他に、それらのクリエイターの工房を回るツアーや、他地域のアーティストを招いたイベント等も行なわれており、逗子・葉山について、クリエイターが活動拠点をつくりやすい場所として、今後、開港祭でアピールしていくことも検討中。

市と市民グループが手を組み「コンテンツありき」でスタートしている開港祭は、今後、実行委員会の組織体制がためが課題。「成り立ちからイベントの寄せ集めだったが、三崎の魅力を整理していくなかで“人の交流”“アート”“自然”的3つのキーワードで整理ができた」と（実行委員石川博英さん）いう。自然に恵まれ、食あり、スペースも豊富にあり、新たな人材も集まりつつある地域でのアートプロジェクト、今後の展開はさらに変化しそうだ。

2013 三崎のさまざまな団体・個人が団結して初開催へ



第1回(2013)は三浦市/三崎においてイベントやワークショップ、フリーマーケットを行っている様々な団体や個人が団結して開催。音楽ライブ、アート展、多種多彩なマーケットが集まって開催された。三浦港周辺の商店街の路地が中心の開催場所に

2014 神社・寺をメイン会場にしてにぎわいづくり



第2回(2014)は三崎の町の守護神社である海南神社をメイン会場として開催し、街中に点在する会場とは別に、にぎわいの中心地ができることに。この流れは第3回へとつながり、第3回はやはり港に近い圓照寺で開催

2015 沖縄の食・文化と交流するイベントも



第3回(2015)は、外の地域の人との交流が起きる場として「開港祭」が位置づけられた。沖縄の食と文化を紹介するイベント「いーちゃ、イヤfestival」。沖縄の食、琉球古典芸能、沖縄ポップス・ロック、エイサーなどがメイン会場で展開された

2015 開かれた港をイメージして「交流」を目玉に



第3回開港祭のもうひとつの目玉が、圓照寺で開催された山形県の「芋煮」とともにライブを楽しむ「芋煮ロックフェスティバル」。木村充揮(豪歌団)、Saigenjiなどのプロミュージシャンや、三浦市から児童合唱団としてCDデビューも果たしている「かもめ児童合唱団」ら8組が登場

スピノオフ企画

開港祭とは別日程、別会場で行なわれたけれど、今後、開港祭の充実の種になりそうな企画を紹介



サヌキ壺

三崎港に近い油壺・胴網海岸で開催の香川県のアーティストを招いてのアートフェス。過去2回「サヌキメイド」として開港祭に参加していた香川県のアーティストが、今回は別日程で、海岸を会場にして作品を展示



クリエイター工房を巡る旅

こちらも開港祭とは別日程開催の「アーティスト工房を巡る旅」。三浦市内で活動する工芸家、現代美術作家のアトリエ6カ所を回るツアーを開催



クリエイター交流会

三崎周辺を拠点にする、クリエイター同士の交流会も開催。今後、クリエイター同士が連携して、開港祭でのイベント等に繋がることも視野においている

実行委員に聞く



三崎開港祭実行委員長
石毛浩雄さん

Q. 三崎開港祭の目的は?

A. 三浦市のファンを増やすことに繋がるイベントを、自分たちで手の内でできること、自分たちが楽しめる範囲で実施しているという感じです。

Q. これまで3回、場所や開催スタイルが変わってきていますね。

A. 三崎港の下町商店街を中心に展開してきました。商店街は風情もありますし、空き店舗もある。小規模スペースですが、交通の便も良いので、今後も会場スペースとして貸していただけないか交渉を続けていきたいです。一方、交通の便は悪くなっていますが、海岸沿いにいくと、やはり大きなスペースがあり、そういう所では大型の展示に力を入れられる。そんなスペースも開拓できればと思います。

Q. クリエイターの移住が増えているようですが、そういう人たちの出展が増えていくのでしょうか?

A. そうなっていけば良いと思うのですが、若いクリエイターも資金がなく、我々も資金がない。現状はなかなか難しいです。ただ、前述のようにこちら側で場所の確保をしたり、舞台を整えられれば、そういう若手アーティストにとっても開催しやすくなると思うのです。発表の機会があれば活性化にも繋がると思っています。現在、クリエイター同士の交流会も始まりネットワークは、これからしていくと思います。

Q. 課題はありますか?

A. 現状は全体的に告知力が弱いのが課題です。どんなに良い企画が行なわれても、周知できなければ人には来ていただけないので。しかし、告知も現実的な問題としてフライヤーの印刷資金がないとか、どう告知していくかの手法もまだ確立できていないですね。

運営スタイル



実行委員会長1人 → 副実行委員会長2人 → 実行委員10人

企画 予算 広報 地元調整 自主事業・運営

実行委員の業務は日程・会場を決めての折衝、必要なミニマムの予算調達(広報、備品調達、保険等)、地元への協力要請、広報活動、自主企画の参加者募集、当日運営などを行なっている。事務局が三浦市市民協働課に置かれており、市のスタッフとも連携があるため、公的な助成金などの情報に強いのは強み。ただ、実行委員10人がフルに活動できていないのが現実、また、実行委員も出展者のこともあり、業務が集中する時に人手不足となりがちなことがあります。

予算

支出	印刷+デザイン費 15万円	音響に関する費用 10万円	消耗品費 1万円
----	---------------	---------------	----------

収入

地域活性化センターからの助成金 25万円	出展者負担金 1万円
----------------------	------------

街の活性化のために助成を受けて動く既存の市民団体が複数活動をしており、その集積として開港祭がある。開港祭は、助成金を主体としたコンパクトな予算のなかで、中心的なイベントの支出を賄いながら、収益性を伴なうイベントは入場料等で独立採算できる仕組みをとる。

SaMAL キュレーション・企画展示実践講座

展覧会をつくる

1.葉山芸術祭 Life is beautiful! —モザンビークとアート—

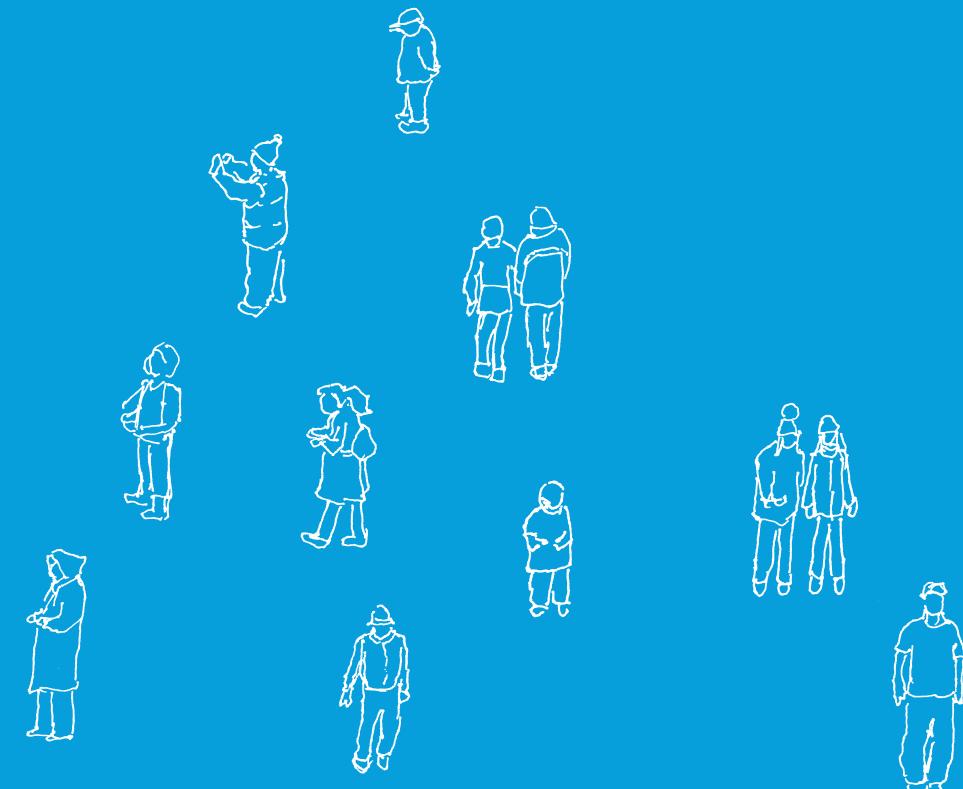
Hayama art festival "Life is beautiful!"

2.逗子アートフェスティバル 小坪・路地展

Zushi art festival "kotsubo / roji Exhibition"

3.真鶴まちなみ ArTreasure Walk

Maduru machina-re "ArTreasure Walk"



展覧会をやってみたい。でも、果たして、自分たちでやれるのだろうか？ 何から、どう始めれば良いのだろうか？

市民が開催する芸術祭のなかで、多くの人達はまず戸惑い、さらにいろいろな壁に突き当たると思います。

SaMALでは、加盟の芸術祭のなかで、これまで、展覧会やワークショップなどの企画を実践したことのない人達にむけて、そのノウハウを学んでもらうために、「キュレーション・企画展示実践講座」という機会を設けることにしました。

「講座」といっても大学の講義室で授業を受けるような形のものではありません。自分たちがつくりたい展覧会に合わせて、美術館のキュレーターやアートプロデューサー、その他、さまざまな専門家らが、展覧会開催のために、実際に即したアドバイスを、直接、実行メンバーに助言、実行メンバーは、助言を元にさらに自分たちで内容を咀嚼し、展覧会の実施にむけて動き出す、まさに「実践」のためのプログラムです。

SaMALとしても実験的に行なった初の「キュレーション・企画展示実践講座」で、左記の3つのプロジェクトが実施されました。

試行錯誤しながらつくられた、プロジェクトの開催までの様子を紹介します。

Life is beautiful !@葉山藝術祭

「合議制でつくる展覧会」は
大変だった。
が、やれました。



SaMALのなかでも最大規模の出展者数を誇る葉山藝術祭。市民企画を集めた葉山藝術祭であるが、毎年、実行委員会直下で開催される「主催企画」がある。2015年の葉山藝術祭の実行委員会主催で開催されることになったのが「Life is beautiful！」展。この展覧会実施のために、2015年初頭、葉山藝術祭実行委員会の実行委員を含む4名が集められた。その後、数ヶ月にわたる展覧会開催までの短く険しい道のりを、その時4人は知る由もなかった…。



えひめグローバルネットワークの事務局に作品を迎える。作品の説明してくれるのは代表の竹内よし子氏。梱包も自分たちで行ない車へと積み込む



会期がスタートする5月5日を前にSPACIA470での作品設営が始まる



はじまりは突然に

2015年、葉山芸術祭としては少し異色な展覧会が行なわれた。住宅街のなかにあるギャラリー「SPACIA470」と森戸海岸に近いカフェ「カラバシ」の2会場で開催された「Life is beautiful! —モザンビークとアート—」展だ。

この展覧会は、アフリカ大陸東海岸の南部にあるモザンビーク共和国のアーティストの作品を展示するもの。SPACIA470では作品を、カラバシで作品にまつわる情報を紹介するパネル展示が行なわれた。モザンビークは1970年代から1990年代にいたるまで内戦状態が続き、アフリカで初めて「子ども兵」が組織され、国内には銃があらゆるところにバラまかれた状態だった。内戦終結後、市民自らが立ち上がり平和教育とともに武装解除を進める「銃を鉄へ」プロジェクトが開始された。回収された銃の95%は爆破処理されるが、5%は国内のアーティストによって平和を訴えるアート作品に生まれ変わる。

それらのアート作品は、大英博物館をはじめ幾つかの公的施設に寄贈されているよう、日本国内では、大阪の国立民俗博物館と、愛媛で国際協力事業を展開するNGOえひめグローバルネットワーク（以下EGNと略記）が作

品を収蔵している。民俗博物館では、2013年夏に「武器をアートに——モザンビークにおける平和構築」展が開催され、その作品を見た神奈川県立美術館の館長、水沢勉氏が葉山芸術祭の実行委員である松澤利親さんに興奮気味で電話をかけてきたのが、この展覧会の発端だった。電話の内容は「葉山芸術祭でこの作品を見せるべきだ」。なぜ自らが率いる県立美術館ではなく、葉山芸術祭なのか？ ……それはさておき、電話を受けた松澤さんは、水沢館長の勢いに面食らいながらとっさに「いくらかかるんだろう…」と思ったという。葉山芸術祭の主催企画では、映像上映やワークショップ開催の経験はあったが、本格的な美術展の経験はなかった。第4回目以降、生活密着型の芸術祭として回を重ねてきたなかで、そろそろ新しいことをやらなくてはならない時期であることを、実行委員として感じ始めていた時だった。松澤さんは、2014年にEGNが収蔵する作品を見に行くことにした。

「実際に作品を見た時、予想を裏切られた感じでした。これなら芸術祭で見せられるかもしれませんと。作品のなかに政治や国際問題、安全保障といった今日的なメッセー

ジがある。かといってやはり、葉山芸術祭はお祭りではあるので、あまりにも暗くて重たいものは、そぐわないだろう、と不安だったのです」と松澤さんは振り返る。作品は良いと思った。しかし、当初から松澤さんのなかにあった「いくらかかるんだろう…」問題にはこの段階でも、なんらメドがたっていない。EGNはモザンビークとの協力関係から作品を寄贈されていたが、美術館・博物館のように「作品を収蔵し、それを貸し出すこと」を生業としている団体ではなく、作品のレンタルに対しての料金はおろか、なにもフォーマットがなく、聞いても答えはない。思いあつた松澤さんは、水沢さんに「普通、いくらかかるんでしょうか？」という質問を投げかけた。帰ってきた答えは「最低100万円」。

「無理だ。と一度は思いました。葉山芸術祭にその資金源はないですから。100万円というのは最低限の作品輸送費と保険料だそうです。通常、美術展のための作品の輸送は厳重な管理のプロの美術運送を使うので、それだけでもざっとその程度の予算はかかる、というのが根拠でした」。

しかし、そのタイミングで浮上したのが、この「企画実践講座」の助成プログラムであった。助成プログラムでは100万円を到底カバーすることはできない。しかし、逆に、ルールがフォーマット化されていない団体から作品を借りるのであれば、交渉や工夫次第では、費用を一定内に収めることはできるのかもしれない、という思いが出てきた。「やってみよう」と舵を切ったのは、2015年1月。会期までは、およそ4ヶ月弱のタイミングであった。

松澤さんがまず着手したのは仲間を集めることであった。声をかけたのは葉山芸術祭についてのリサーチをしている関東学院大学の兼子朋也さん、そして建築家の清水明絵さん。この3人はワークショップやイベントの経験はあるが美術展の経験が乏しい。もう少し専門性のある助っ人が欲しい……そこでもうひとり、声をかけたのが、近所に住む三澤知雅さんだった。三澤さんは美術大学の出身で、母校に助手として勤務していたこともある。自身の作品を発表するグループ展を複数回経験しており、また三澤さんが育った葉山の自宅は、現在、部分的にギャラリーとして営業している。経験の浅いメンバーにとって心強い味方だ。





会場での作品設置が進む頃、FMラジオ番組の取材に
対応する



「Life is beautiful !!」展のポスター(左)と告知ハガキ(右)。ポスターはむやみに大きいと張り出しを敬遠されることもあり、小さめを心がけた。告知ハガキも手渡しや知り合いなど「顔のわかるレベル」で渡すことが実際の来場に繋がる。メンバーが手で渡せる範囲の部数を印刷した



神奈川県立美術館の水沢館長(左から2人目)の助言を受ける、展覧会実施メンバー

話をしつくした、コンセプト決め

さて、編成されたチームが最初に顔を合わせたのは2015年1月6日で、会期は4月30日から。残されたのはたったの3ヶ月しかなかった。企画実践講座のアドバイザーを水沢館長とし、館長から「展覧会のイロハ」を学ぶミーティングをもったのは2月8日。「展示の方法や場所、具体的なことを考えるのは、コンセプトが欲しい。それに作品を見たり、知ることが必要。広報も2ヶ月前には動き出したい」という三澤さんの意見により、2月には全員で作品を見る機会をもち、モザンピークの状況にくわしいEGN代表竹内よし子氏から直接話しを聞き、コンセプト策定に集中することになった。

「コンセプト決めがいちばんキツかった」と振り返るのは清水さん。「私は展覧会開催が決定した後に参加したので、最初はなぜ葉山芸術祭で武器アートをとりあげるのか合点がいかないところがあって、水沢さんに掘り下げる質問しました。話をしているうちに、崇高なアート作品じゃなく、埃も油も被っている。そういう作品と美術館で対面するのがいいのか、生活に近い場面で見るのがいいのではないか? というあたりでようやく腑に落ちました」。

ミーティングは、仕事終わりの夜8時に、全員がコンセプト案を持ち寄って、深夜まで続くことも度々。松澤さんは、「大変でしたね。水沢さんからコンセプトは誰かひとりが決めないと無理だ、合議制ではつくれないと、大分心配もされた。ただ、我々は合議制でやろうと思ったのです」。ひとりでも納得しない人がいる案は却下される。段々とした会議のなかで、三澤さんが提案したのが「明るくキャッチーな印象に」ということ。作品は武器でつくられたといえ、暗いところがなかった。暗い状況はあったのかもしれないが、そこには「武器がなかったらあったはずの生活への憧れ」が感じられた。話し合いのなかで、「武器、戦争、平和という言葉を使わないほうがよい」という考えに辿り着いた。段々と頭の中が整理され、最終的に「Life is beautiful ! —モザンピークとアート—」というフレーズに落ち着いた。

「コンセプト決定は一番大事なポイントでした。この展覧会は4人の誰にとっても食べるための仕事ではなく、“やらなきゃいけないこと”ではなかった。であればこそ、本当にやりたいものにしなければ意味がないと思ってました。

最後にみんなが納得できたところに辿り着いた後は早くたですね」と清水さん。三澤さんも、「話しに話したから、みんなの想いが展覧会の“はじめに”の部分に凝縮したと思う。タイトルは同名の映画のことも、連想していました。人生は捨てたものじゃない、というメッセージにのせて、作品のもつ力を伝えたかった」と振り返る。

コンセプト決めのプレークスルー後は、企画調整・予算管理は松澤さん、作品の輸送は兼子さん、広報ツールの制作は三澤さん、広報メディア対応は清水さんと分業体制もでき、準備は急ピッチで進む。3月には作品の選定、そして問題の「輸送」については自ら車を運転し、手で運ぶことで、難関の予算問題をクリアした。保険についても、作品が壊れた場合、双方が知恵を出し合い解決するという、通常の美術作品では有り得ない含みをもった条件で固まっていた。これもEGNの竹内氏が展覧会のコンセプトを理解してくれたからだろう。

会期が始まった4月下旬。会場は、葉山の中心で交通アクセスの良い森戸海岸近くの「カラバシ」の2階で情報展示を、作品の展示は、十分な広さがある三澤さ

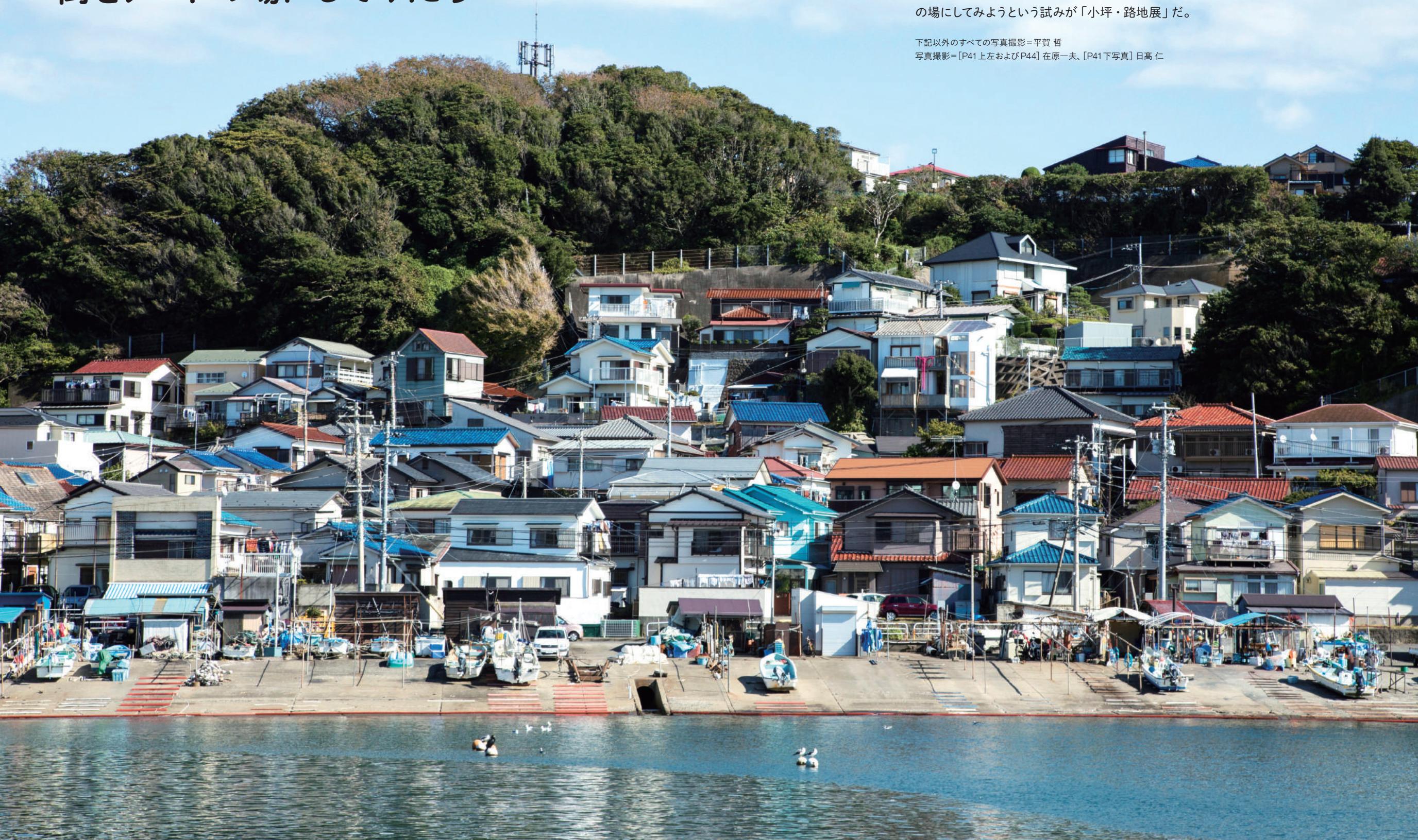
んの自宅ギャラリー「SPACIA470」を使用することに。「SPACIA470」は、日本のモダニスト建築家、故・吉坂正隆氏が設計した建物である。吉坂設計の建物で現存しているものは少ない。その年の葉山芸術祭では遠藤新設計の加治邸での展覧会もあったことで、建築ファンが来場することが予想された。この会場を使うことで、建築ファンも呼び込むことも狙いとした。展覧会を終えて松澤さんは「水沢さんに展覧会の基礎を教えてもらいました。今まで、展覧会の経験もあるけれど、やはり基本を知らずにやっていたなと思います」という。三澤さんは「これまで、展覧会は意見の相違がないメンバーとしかやってこなかった。今回のメンバーは良いと思う点が一致しないところもあり、そのなかで感覚的な部分に頼らず、言葉を尽くして話すことの大切さを学びました。ただ並べるだけの事務的な展覧会でなく、つくる側の想いを伝えた展覧会になったと思います」という。仕事じゃないから、納得できる展覧会にしたかったという実行委員達の怒濤の4ヶ月は、明るい初夏の風のなか、10日間の会期とともに幕を閉じた。

小坪・路地展@逗子アートフェスティバル

街をアートの場にしてみたら

逗子市と鎌倉市の境にあたる小坪地区。なかでも小坪漁港に面した集落は、急斜面に家が貼りつくように立ち並び、その間を小さな路地が迷路のように張り巡らされ、車がアクセスできない世帯が200軒あまり存在するという。ここには車の喧噪もなく、路地の街には子どもや猫たちがのびのびと行き交い、住人同士も自然に挨拶し合う距離感がある。そんな、街の中心地から少し外れた場所で街自体をアートの場にしてみようという試みが「小坪・路地展」だ。

下記以外のすべての写真撮影=平賀 哲
写真撮影=[P41上左およびP44] 在原一夫、[P41下写真] 日高 仁





集落の高台から小坪漁港を見下ろす「南町テラス」。そのテラスからは相模湾ごしに富士山も見える

「小坪・路地展」の構成

「小坪・路地展」の展覧会を企画し、中心となって進めたのは、自身もこの小坪に住み、仕事の場を構える建築家の日高仁さん。

日高さんは、5年前に小坪に移住。小坪漁港に面した傾斜地の上部に建つ一軒家を自らの設計で改装し、3人家族の住居スペースと自身の仕事場、そして小さなカフェスペースへと変身させた。そのカフェ「南町テラス」は奥様の手づくりのパンやお菓子が人気、そして知る人ぞ知る逗子の絶景スペースとして、営業日の週末を狙ってわざわざ訪れる人も多い。これまで建築家として都市計画や街づくりに関わってきた日高さんは、イベントやワークショップを通して地方の集落の活性を狙ったプロジェクトの経験があるが、街路のような広いエリアを使った展覧会を開催するのは初めて。「企画実践講座」の仕組みを使って3人にアドバイザーと、さらに他の人の協力も得て、展覧会の構成を進めていった。

た。まず、小坪在住で、タブロー作品を中心に現代美術の世界で活躍する作家である小林孝亘さんに相談。自ら綱をない建物を縛るインスタレーションを行なう作家の松本春崇さんを紹介された。さらに、映像作家であり、「ハンズボン映像展」としてショートフィルム作品を集めた上映会を主宰する泉原昭人さん、美術大学に在学中の2人の若手作家、澤田未奈さん、馬場亜衣さんを紹介された。さらに、地元繋がりの鎌倉市在住の作家の渡邊聖子さんを含め、各作家の作品性を活かす形で、神社、漁港や漁船、路地を使ったインスタレーション、南町テラス内外での展示、漁港での映画祭というラインナップができた。さらに、関東学院大学の人間環境デザイン学科の学生5名が中心となって、地域の子どもや保護者がワークショップを行ない路地に作品を仕込む展覧会という構成が出来上がっていった。

小坪・路地展@逗子アートフェスティバル



家縛りプロジェクト

「家を縛る」プロジェクトを行なう松本春崇氏の作品。集落の一番高台の天照大神社から、南町テラス、漁師小屋、漁船鮎丸を十字に縛りつつ、繋いでいく。縄を伝って歩くと自ずと小坪の路地の散策に。



化粧

インスタレーションや本の形で作品を発表することが多い渡邊聖子氏による路地のなかでのインスタレーション。路地のなかに残された小さな井戸のそばで展示され、日中そこで展示される計画だった。



路地 meet to… プロジェクト

関東学院大学の学生グループが「小坪路地散策Map」を作成。路地上の「かくれんぼ石」を探し、小坪の路地を歩く仕掛けをつくった。ワークショップ参加者が小坪海岸で拾った石に魚をペイントして路地に置いた。

家縛りプロジェクト(船縛り)

縛られた遊漁船「鮎丸」と、鮎丸の船主で漁師の布施賢司さん。布施さんは小坪漁港で「もっと柔らかい発想の持ち主なのでお願いした」と日高さん。作業を手伝った布施さんの感想は「なにやってんだろうねえ(笑)」。



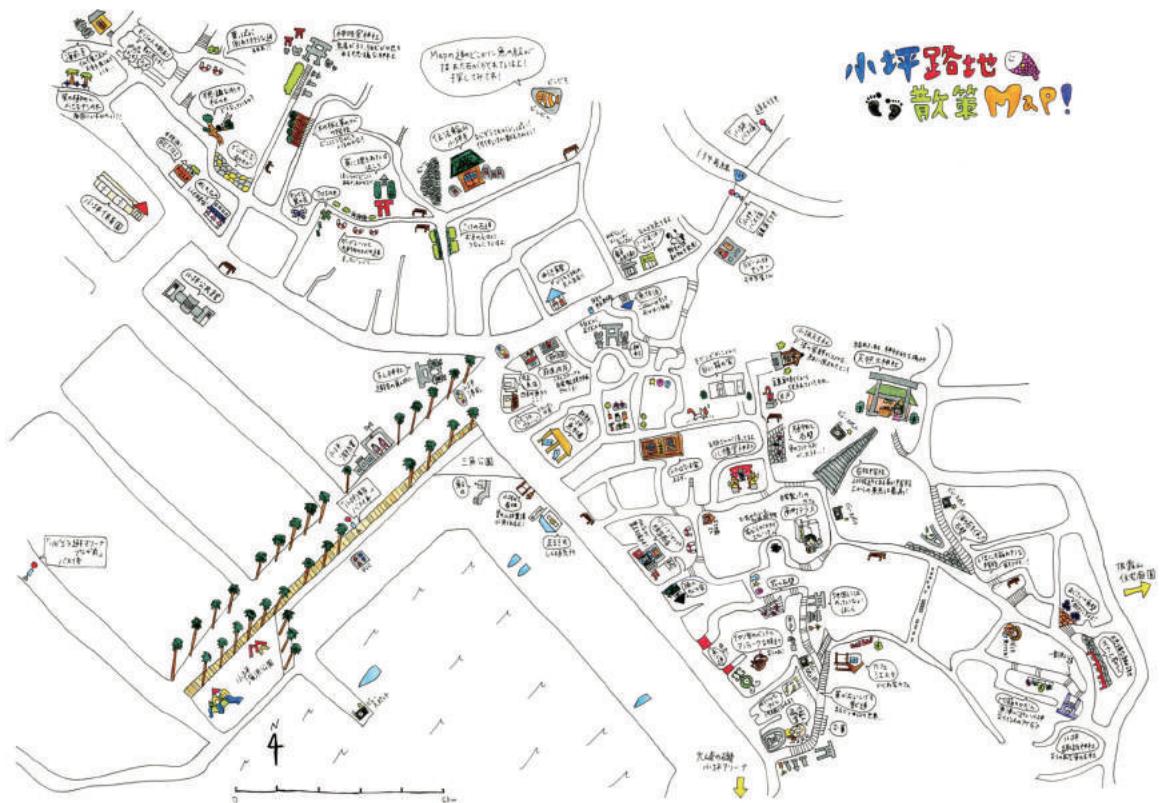
アトリエ

南町テラスの一角で展示された、武藏野美術大学大学院在学中の澤田未奈氏の絵画による作品展。南町テラスの壁面に、作家のアトリエのように額装されない紙に書かれた色付き素描のような作品が並ぶ。



ハンズポン映画展

通常は漁業のためにしか利用されることのない漁港の一区画を屋外映像シアターに見立て、12組の映像作家達がつくるショートフィルムの映像を上映する展覧会。会期中の1日、夕方～夜にかけて上映。



「小坪・路地展」パンフレットの裏面に掲載された「小坪路地散策map」。作成したのは関東学院大学の学生たち

街のなかに展覧会を仕掛ける

急坂を登ってたどり着く「南町テラス」からは、逗子随一と言ってよい眺望が広がる。本来この家の住人しか味わえない遠望を、「まちの駅」としてパブリックな場所としたのには、日高さん自身が建築の分野でも都市工学を専攻し、街づくりの仕事に関わってきた経験が反映されている。外の人が地域に来ること、「非日常」が小さな集落に、時に必要なことをこれまで経験してきた。

「街は放っておくと、その場所の良さが10年、20年で変わってしまう。街づくりを自治体任せにしていると、いきなり海岸に巨大な壁が作られてしまったり、立ち入り禁止の場所ができてしまったり、市民が街づくりに関わる事がないまま、お上に任せてしまうと、結局、住む人にとって残念な結果になりやすい」という。

「住んでいる」だけでは、人はその場所の魅力を忘れがちだ。場所の魅力を住む人が認識していないと、いつのまにか、その場所の魅力が何かの力によって、取り去られてしまいかねない。日高さんはアートを媒介にして、小坪の魅力を内外の人が再発見することを試みた。車の入ることのできない「路地」は不便だけれど資産。車が入れない

から子どもが自由に遊べるし、愛らしい草花が擁壁に繁り、その上を猫が行き交う。集落で人と会えば自然に挨拶をかわす距離感がある。一見不便な点の価値が見直すことは、その場を大切にすることにつながる。路地をメインのする展覧会を企画した背景だ。

「小坪・路地展」は企画実践講座のアドバイザー制度を活用。ひとり目のアドバイザーは広島県尾道市のNPO法人尾道空き家再生プロジェクト代表理事、豊田雅子さん。ふたり目はアートやデザインを使っての地域おこしに詳しいデザインプロデューサーで編集者の紫牟田伸子さん、3人目は写真家の平賀哲さん。平賀さんには、言葉ではなく、写真で街の魅力を拾いだしてもらうことで、地域の良さを視覚的に切り取ることを託した。

豊田雅子さんは、広島県尾道市で空き家となった家を再生するプロジェクトを続けている。尾道市は大林宣彦監督の映画で度々舞台になる坂の町。小坪同様、車が入れない集落は空き家が増え、放置された家が一度とり壊されると現在の法令上、そこには家が建てられず、いずれ街並は消えていく運命にある。尾道出身の豊田さんは就



10月31日から11月3日までの「小坪・路地展」で、たくさんの人がこの地区を訪れた

職のために地元を離れたが、仕事で世界を巡るなかで尾道の魅力を再認識し、朽ち果ててしまう家と街並を救うために、当初は私財を投じて空き家を購入、地域の人が集う場所にし、そこを拠点に空き家再生に協力する仲間を集め、地域のサポート体制を整えた。自治体とも協力関係にあり、移住希望者が移住に至るプロセス全般をサポートする活動をしている。

日高さんは、尾道市に、地形や地域の抱える課題で共通点を見いだし、豊田さんを小坪の街に招いた。「豊田さんには具体的なアイデアを頂いた。例えば今回、イラストマップをつくったのですが、マップは同じものを使い続けることで後から変化が見えるとか。また“この場所は使えそう”といったこと。漁港の角の小さな浜なのですが、確かにかつては朝市をやっていた場所で、そういう場所での朝市を復活させることで、地域の人たちと連携のきっかけになるかもしれませんと思いました」。

デザインプロデューサーの紫牟田伸子さんとは、小規模なアートプロジェクトに対するキュレーションのあり方をディスカッションした。日高さんは「今回、準備期間の制約も

ありベストな進め方ではなかった。今後、良い形で進めるとしたら? という前提で助言をもらいました。予算やかけられる手間の制約はありますからね…」という。「路地展」を見た紫牟田さんは「小坪が上から下まで繋がって見える“家縛り”や、子どもたちが路地に石を置いた“路地meets to”が面白かった。知らない路地を歩くのは、歩く側にとっては不安なもの。綱があったり、石を探したり、というのは、よそ者から見ると茫洋としたエリアにページネーションを与えるような効果がある」と今回の展覧会を評価しつつ、今後、「地域に人を呼び込む」ことを目的とした場合、アートの力について「そのもの自体が力を発揮するアートと、人をつなげる手段としてのアートは別。小さなプロジェクトこそ、それらの点を見つめて、戦略的かつコンパクトに進めるべきでは」という。

小坪地区が初めて「アートの場所」となった今回。日高さんは、今後、少しずつ地域の人に声をかけて協力関係を築きながら、「路地展」を続けていきたいという。「少しずつ拡げて5年目位に完成させる気持ちで」。来年の路地に何が起こるのかが楽しみだ。



ArTreasure Walk @真鶴まちなみ
心にふっと落ちてくる
美を探す旅をつくる

神奈川県と静岡県の境にある真鶴町。小ぶりな半島、湾のなかの港、その湾を囲む日当りのよい斜面、その斜面に細かく立ち並ぶ家、家の周囲を這うような小さな道、ゆっくりと坂道を行き交う町の人。

どこかの城下町のような伝統の街並があるわけでもない、特別かわった史跡があるわけでもない。至って普通。ただ、なんとなく視界で感じる温かさのある……

普通の町だけど、やはり少し違う感じがする、人口8000人弱の静かな町、真鶴町。そこで一昨年から開催されている「真鶴まちなみ」は、現代美術の作家が招かれて滞在制作し、3週間の会期中、街中で作品が展示されるアートプロジェクトだ。



聖なる所
静かな背戸
海と戯れる場所
生きている屋外
(「美の基準」より「場所」の原則にあるキーワード)





真鶴港を見下ろす高台の空き地で作品「風の小屋」を制作中の作家・鉢井 喬氏。p46-47の写真は完成した作品を上から見た風景。風をうけて薄いアルミ製の羽根がゆらゆらと動く



左、「コミュニティ真鶴」でVST鑑賞法のレクチャーを行なうアートコミュニケーターの長井理佐氏 右上.20年に渡り葉山芸術祭を続けていくなかで得た考察を語る朝山正和氏 右下.ガイドツアー「ArTreasure Walk」のガイドを務める学生たちも会期を前にリハーサルの追い込み中



美の基準のある町で

本誌冒頭のページ(p.20-23)で紹介したように、真鶴町は日本でも珍しい、町の条例に「美」を取り込んだユニークな場所だ。「真鶴まちなーれ」の総合ディレクターを務める平井宏典さんは真鶴で生まれ育った。実行委員の筆頭として、キュレーター、プロデューサー、ボランティアスタッフの統率役……とひとつの肩書きの裏に、多くの現実の役割が隠れていて会期直前の2016年3月、極めて多忙な日々を送っていた。

平井さんの専門は美術ではない。本職は和光大学経営学科の教員で、主な研究対象は美術館経営。経営学の立場から、美術館や博物館の経営と、その価値を測る研究を続けてきた。一方、大学院時代から町づくり審議会の公募委員として、関わってきた平井さんは、財政難や高

齢化と人口減少が進む町を、盛り上げようとする住民グループのメンバーや役所の若手スタッフとの交流があった。そのなかで、これまで行なわれていた住民グループによるいくつかの町の活性化のためのイベントを整理・編集する形で、2014年夏、有志の仲間と、現代美術の作家を町に招き、町の中に作品を設置するアートプロジェクト「真鶴まちなーれ」を立ち上げた。

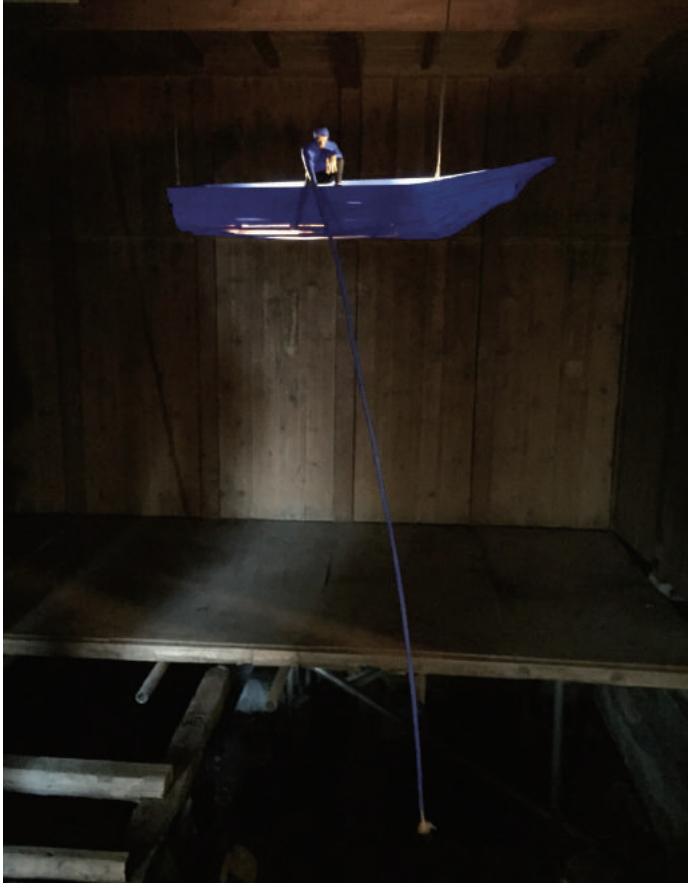
「このイベントは、町の内側にむかって、僕らのまちの美の基準ってなんだ? と問いかける意味もありますが、自分にとっては外向きのイベント。外の人に真鶴を知って、来てもらいたいし、深いレベルで好きになってまた戻って来てもらいたいと思っているんです」という平井さんは、第2回の今回、前回の2014年の開催でも行なったガイド

ツアー「ArTreasure Walk」を強化することにした。きっかけは、SaMALの視察で出かけた「別府現代芸術フェスティバル」で、総合プロデューサー山出淳也さんの「うちはバイキング料理じゃなくてコース料理を出す。でないと別府の良さは伝えられない」という言葉に接したことだった。いろいろな料理を用意し、好きなものを好きなだけ食べてください、というサービスではなく、料理人が厳選した材料を、適した調理方法でストーリー性をもった演出で、というサービスだ。そうでなければ、時間や知恵の集積で成り立ったものの良さは伝わらない。今回の第2回に当たって、平井さんは前回に比べて思い切って作品点数を減らし、7組の作家の作品を町のなかの8つの場所に設置することにした。メイン会場は町の

中心の商店街に近い「コミュニティ真鶴」。そこから各サイトまでの距離は1kmに満たない。作品を辿ると、家と家の間の小さな路地「背戸道」や、港、商店の蔵、海を一望のもと見下ろす高台、港を向いて並ぶ独特の家々のたたずまい等、表情豊かな真鶴を味わうことになる。前回、2014年は期間中、5回開催したツアー、今回は23日の期間中、毎日2回開催する。8カ所のうち、2カ所はガイドツアーに参加しないと観ることができない。ツアーでは、背戸道や石垣の話、真鶴港の歴史、真鶴にいた江戸時代の禪僧、漁師町として賑わった頃等々、さまざまな話を聞くことができる。もちろん、各アートサイトでは、作品について、作家について、制作にまつわるエピソードなどを聞くことができる。



高台の一軒家で公開された作品 鈴木泰人「風は、光」



港近くの商店裏の蔵に展示された作品 阿部乳坊÷伊藤昌稚「海の底に手を伸ばす、見えないものに触れるために」



1

対話をしながら「観る」を深める

ガイドを担当するのは、平井さんの他、4人の地元出身の実行委員、そしてボランティアスタッフとしてサポートをする和光大学経済経営学部の学生たちだ。ガイドメンバーの多くが大学生で、美術の専門知識もアートプロジェクトの経験もない。そこで、平井さんは企画実践講座のアドバイザーとして、葉山芸術祭の名物実行委員の朝山正和氏と、アートコミュニケーターの長井理佐氏を招いた。20年以上に渡り葉山芸術祭を運営している朝山氏には芸術祭を長年継続させるための地域住民との関係構築といったベーシックなことを、長井氏には、鑑賞者を作品へと導くため、コミュニケーションについてレクチャーを要請した。

長井氏はVTS (Visual Thinking Strategy) 鑑賞法の専門家。VTSとはニューヨークの近代美術館の教育部長であったフィリップ・ヤノウィン氏と認知心理学者のアビゲイル・ハウゼン氏が開発し広めた、美術史の知識に頼らず、作品を見て、対話を重ねることにより作品の見方を深めていく手法だ。長井氏は、ピカソの作品「ゲルニカ」を題材にしながら体験するレクチャーを行なった。「この作品を見て、

どう思いましたか?」「恐いと思った」「どこが恐いと思いませんか?」という対話を進めていく。

参加した実行委員の遠藤日向氏は「ピカソのゲルニカは美術の教科書等で知っている絵でしたが、絵の背景をすっかり忘れたまま、長井さんとやり取りを続けているうちに、色々な考えが浮かんできて、最後に内戦の絵だと聞いて、すっと府に落ちた。ゲルニカという作品が自分により近くになった気がしました。これまで作品の情報を伝えなくてはいけないと思っていたけれど、そうではないという事が分かったし、お客さんと会話が途切れてしまうのが、恐かったのですが、間という空白も大切なかもしれません」と話してくれた。

「対話型鑑賞に着目したのは、ガイドや参加者同士の対話を通してツアーの体験を豊かなものにしたいから。アートと町を巡って自由に語らってほしい」と平井さん。

会期が始まった2016年3月、春の陽気となった真鶴には、2年前にも増してたくさんの人が訪れ、「美の基準」のある町の魅力と現代美術を多くの人が楽しんでいる。



2



3



4



5

1. ツアー終盤の港がよく見える高台の道では、多くの人が思わず足を止めて景色を見る 2. 地元出身の大学生実行委員と外からきた大学生ボランティアが協力して盛り上げる 3. 人気のワークショップ「石花（ロックバランシング）アート」（石花会）を楽しむ来場者 4. 「コミュニティ真鶴」ではワークショップが行なわれ、地元内外の人の交流の場に 5. 「来場者を暖かく迎えることを大切に」。気持ちはそこかしこに現れる



SaMAL企画実践講座 番外編

里山も爆発だ!@逗子アートフェスティバル 森と子どもを育てる映像づくり

逗子・葉山地域で里山保全活動を行なう市民グループ「森もり俱楽部」は、子どもたちに野外でのさまざまな体験の機会を提供し、その体験を、ドキュメンタリー映像に仕立て、子どもたちの次のアクションにつながるモチベーションづくりを目的としたプロジェクトを展開中だ。

「森もり俱楽部」は神奈川県の二子山山系(三浦半島の付け根部分、横須賀市、葉山町、逗子市にまたがる丘陵地帯)で、アウトドアを楽しみ自然の恵みを享受しながら、森を知りそして守る活動を続ける活動を行なっている。活動を進めるプロジェクトリーダーの室伏多門さんは、その活動を「森の資源(余暇・運動、エネルギー、生活雑貨、服飾、住建材、食材、サバイバル)を掘りおこし、その資源を使うことで、森を守る循環をつくる」と捉えている。かつての日本は、人里と裏の山が密接につながっており、山に入り炭焼きなどでエネルギーをつくり、しば刈り(下草とり)をすることで畑の肥料とし、台所や風呂の燃料を得るなど、人が森や山に入ることで生物多様性や心地よい環境が保たれる「里山」という循環のかたちを保っていた。昭和中期の燃料革命により、人と裏山は分断されてしまったが、そのつながりを取り戻すことで、両者が生きながらえていけるのではないか、という考えだ。

「森の保全は長期スパンで考えないと、生き返らせることが難しい。現在、高齢の方が中心になって活動されていることが多いのですが、子どもたちに活動してもらわないと今後につながらない」という室伏さん。森は子どもたちが育つ場としても、多くの学びの場となるが、ゲーム機器に囲まれ、塾通いに忙しい子どもたちを、森に連れていくには仕掛けがいる。アウトドアに出るためのちょっとした手助けや、きっかけづくりを大人がしてあげることで、子どもは外に出て遊びながら、自然、そこで身を守る

技術を学んでいくことになるだろう。そして、そのためには、まず、大人がそのことに気付き、行動することが必要。室伏さんらのグループは、子どもと保護者が一緒に気付いて始めてみる活動をつくりだそうとしている。

「里山“も”爆発だ!」を標語に活動する森もり俱楽部は、その手始めに、2016年3月、神奈川県三浦市の胴綱海岸でトーキイベント「Light米fire」～スイハニングmeets たき火Café @胴綱海岸「ここから始まる新しい1万年」～を開催する。「炊飯」を日本の文化として捉え、各地で「炊飯イベント」を開催する静岡県の米店店主・長坂潔暉氏を講師に迎えてのイベントだ。

意外にも「炊飯」という技術は日本固有のもの。そして、稲作と炊飯技術は里山が支えてきたのだそうだ。このイベントでは山で薪拾いをし、羽釜を使い、薪の火での炊飯を身近に見ながら、親子で自然、エネルギー、人の生活の関わりを考えみようという、まずは第一ステップだ。

室伏氏らのグループは、今後、さらに、子どもと大人の経験を深めるイベントを開催していく予定。「里山で、生きる力に溢れた現代的な価値を発見して、アート表現で、それを発信していく活動を続けていきます。表現のかたちは参加者の方に自由に考えてもらいますが、全般はドキュメンタリー映像としてまとめていきます」とのこと。映像がアートプロジェクトで発表される日が楽しみだ。

推進委員座談会

SaMALのスタート、そしてこれから

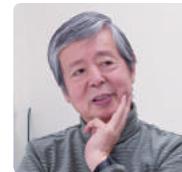
座談会開催: 2015年12月4日 関東学院大学

相模湾・三浦半島アートリンクー地域発アートプロジェクトを育て支える人材の育成と交流—事業がスタートして1年弱。この事業を立ち上げ、文字通り推し進めてきた4人の委員が、事業立ち上げの舞台裏から、活動のなかで見えた今後の課題までを語り合いました。

出席者(敬称略)



山崎 稔恵
関東学院大学
人間環境学部 教授
SaMAL代表



伊藤 裕夫
日本文化政策学会会長
SaMAL副代表



兼子 朋也
関東学院大学
人間環境学部 准教授
SaMAL推進委員



松澤 利親
葉山芸術祭実行委員
SaMAL推進委員

芸術祭って勝手にやっていいの?!

—SaMALの活動を紹介する冊子を制作するにあたり、今日はSaMAL設立から推進委員として関わっているメンバーで、SaMALのこれまで、そして今後について話していただくことになりました。まず、どういう経緯でSaMALが設立されたのか、その目的についてお話いただけますでしょうか?

松澤利親—私は葉山町で葉山芸術祭に関わってきました。2011年に、逗子市の平井市長から「逗子でも葉山芸術祭みたいなものをやりたいのだけれども、行政がリードしてやるものではない。葉山芸術祭のように民間が主導するイベントが逗子市にできてくる雰囲気をつくりたい」というような話がありました。そこで逗子市と葉山芸術祭の共同企画で、逗子市は場所の提供、中身は葉山芸術祭にお願いできないか? という話になり、「芸術祭をつくる会議」を2011年の第19回葉山芸術祭のなかでやったのです。

その会議で、いろいろなテーマを議論をしましたが、そのなかで、相模湾岸の住民が主体でやっているアートフェスティバルが横に繋がることで、葉山芸術祭のように開催回数が多いアートプロジェクトが解決してきた問題を、新しく始めたアートプロジェクトへ情報提供し、逆に新しく始めた新しい感覚の人たちから様々な新しい試みを吸

取できたらすばらしい、そういう会議ができたらいいなどというような話をしたんです。そのときは、それを「アートリンク構想」と言ったのです。

大袈裟に言うと、その時、私の頭のなかにあったのは毎年スイスで行なわれている世界経済フォーラム年次総会、通称ダボス会議なのです。テレビでこの会議の討論を見て、こんな話し合いの場があればいいなと思っていたのです。葉山にある湘南国際村では、神奈川国際交流財団がミュージアム・サミットや、21世紀円卓会議などを開催し、情報交換や議論の場を提供してくれています。葉山芸術祭も地元の団体として何度もここに参加しました。こうした経験から、いろいろなテーマを、様々な角度から議論することが大事だと思っていました。その「地域のアート版」みたいなのがあればいいと思っていたのです。

最初に「芸術祭をつくる会議」を開催したとき、逗子文化プラザホール担当で、間瀬勝一さんという方が、この会議に関わっておられたのですが、アートリンク構想にすごく賛同して下さいました。けれども、実現にはお金もかかるし、現実化しなかったのですが、その後、間瀬さんが小田原市役所に移られて、いまSaMALで一緒にいる伊藤さんが、その後にいらっしゃいました。

伊藤裕夫—2012年の4月から、私に替わったのでしたね。松澤—伊藤さんとは、実は以前から面識がありました。

アートリンク構想について伊藤さんからも「それはいいね」という話になったのです。とはいっても、やはり、すぐには実現が難しくて、結局考えるばかりで2～3年たったわけですね。

伊藤—そうですね。僕は2012年の4月に逗子市の文化施設の指定管理移行の担当者として委託を受けていた。その時点で逗子市に文化振興基本計画があり、市民主体の文化イベントであるアートフェスティバルが重点事業として近く予定されて、葉山芸術祭と「芸術祭をつくる会議」をやっていた。ぼくも会議に出席して、結構活発な議論もあったし、市民の間にもムードがある、行政は側面から応援すればいいのかなと思っていたのだけれど、半年ぐらいしたときに、実は誰もなにも動いていないことが見えてきたのですね。

逗子市長が「行政が言い出すのではなくて、市民が立ち上がりてくるのを理想とする」と言うのは大賛成だったのですが、市制60周年にアートフェスティバルをやることを計画に書いてしまっているので、どこかで動かすことなく火をつけないと、ということで、私は行政側にいたので、行政主導っぽい形でスタートしてしまった、というのが逗子アートフェスティバルの背景です。ただ、真に行政主導になってしまふのは、良くないな、という思いがあって、市民のなかでまちづくり関心のあるグループを中心に、2カ月に一度位の割合で、どのようにやったら市民主体でアートフェスができるか、とか、行政のお金を使うにしても、行政との関係を対等にしていくためにはどうしたら良いかみたいなことについて、取手アートプロジェクトの

人とかに来てもらったりしながら、3～4回勉強会をしていた。逗子市の街を活性化するために、有志で勉強会をやっていくという方式ではなく、いまはNPOになった市民グループに、年間40万円ぐらいの予算がついていたので、そのうちの一部を、勉強会の費用に使ってもらい議論してもらうという、かなりお膳立てするかたちで始めたのですね。

松澤—このような伊藤さんの逗子アートフェスティバルへの関わりからもアートリンクが必要だと思ったのです。情報が横に繋がって、新たに始めるところは先にやっているところから学び、新しく始めたところは、新しい方式をみんなに広げられる民間プラットフォームがあれば逗子アートフェスティバル設立にも役立つ。行政主導がすべて悪いと言っているのではなくて、本来、文化的なものは自立してやるものだと思っているから。

話が変わりますが、葉山芸術祭から独立した現在の大磯芸術祭実行委員のひとりが独立するときに「芸術祭は勝手にやっていいのですか?」と聞いてきたのです。「町で芸術祭と勝手に名乗っていいのか? 行政に許可を得なければいけないのではないか」みたいな質問でした。え～、それが普通の感覚なのか? と初めて思ったのです。

一方で当時、葉山芸術祭のなかで、逗子海岸を舞台に、若い友人グループが「浜の映画祭」を最初手探りで自主的に、自律的に始めていました。こちらは企画がどんどん拡大してきました。3回以降完全に独立しました。

伊藤—いまは逗子アートフェスティバルのなかの「逗子海岸映画祭」になりました。

松澤—逗子でも、こういう自主自立的団体があるのですよね。だけど、逗子市が彼らを応援するという感じでもなかった。少なくとも初期はそうです。これをみて有志の団体の構成メンバーが集って、みんなで話し合う、知恵や経験を共有する必要性を、当時すごく感じましたよね。

兼子朋也—「立ち上げ」ということでは、葉山芸術祭のなかからいろいろな芸術祭が独立していったというのがあります。1998年に葉山芸術祭に参加していたメンバーが「金沢文庫芸術祭」を立ち上げたし、2010年にはやはり、葉山芸術祭で開催されてきた「浜の映画祭」が、「第1回浜の映画祭」という形で独立していく。2011年には「大磯芸術祭」が独立するという形で、いろいろな芸術祭が葉山芸術祭から巣立っていくなかで、ネットワークはいちおう、緩くできていたのですね。ただ、葉山芸術祭と金沢文庫は繋がっていて、葉山芸術祭と大磯も繋がっているのだけれども、金沢文庫と大磯が繋がっているかというと、そうでもなかったのです。

松澤—基本的には細い個人的な繋がりだけだから、たとえば、逗子アートフェスティバルの実行委員会の数名は、大学の先輩や、同級生で知り合いです。でも、それだけでは葉山芸術祭と逗子アートフェスティバルは横に繋がっていないからです。なぜかと言えばお互いのプロジェクトの話題を議論する場がないし、個人的な交流の厚みがないからです。やはり蜘蛛の巣状に人もプロジェクトも繋がる場が必要でしょう。だから、アートリンク、いまのSaMALのような形が必要だと思ったんですよね。

アートイベントは愛とマネジメント

—SaMALの目的について、なにか端的に言葉で表せますでしょうか? 会議のなかでは「地域のアートマネジメント力を上げる」という言葉がでていましたが。

伊藤—僕自身は先ほども言いましたように2012年の秋から逗子で小さい規模で人材育成を始めて、アートプロジェクトをやるには事務局の運営、企画の立案等、結構大変なのです。それらをできる人がいないと無理です。大学の授業でもそういう話をしてきましたしね。人材育成というのは絶対必要だと感じていたのです。また広がりも欲しい。単に逗子、葉山に限らずに、神奈川県の政令都市から外れている部分の人たちも応援していくような。

松澤—私が20数年間やる方の側で感じたことは、我々は、プロの団体ではないからこそ、アートマネジメントがしっかりしていかなければいけない。お金のこと含め、そうしないと長続きしないわけですね。

伊藤—ふたつ理由があって、ひとつはマネジメントというのは継続性なのです。1回の単発のイベントをやるのは熱意さえあればできるのです。ところが、2回、3回と継続力をもっていくためにはノウハウを蓄積していかなければいけない。そのためにはマネジメントが必要になってくる。

2番目に、文化事業の人材育成は、日本では25年前から始まってはいるのですが、ほとんどが文化施設、オーケストラとか、劇団という既存の芸術団体の人材育成が中心なのです。

松澤—プロ向けですね。



2013年5月、逗子市で開催された「芸術祭をつくる会議ワールドカフェ」

伊藤——「大地の芸術祭」^{*1}がきっかけになったと言われていますけれども、2000年以降、各地でアートプロジェクトが増えてきたのです。こういう場合、文化施設の人も一部個人的には関わっているけれども、文化施設が主体になっていませんし、芸術団体が主体になってもいないのです。基本的には実行委員会が中心となる。NPO法人化する場合もあります。そういう組織体にきちんと焦点を合わせたアートマネジメント講座というのは、あまりないのですよね。そういう組織化されていない一般市民が中心となる場合の、アートマネジメント力を高めていかないと、地域のアートプロジェクトは多分、一発花火で終わってしまうのではないか、という課題を何年か前から感じていたんですね。

松澤——いま、伊藤さんがおっしゃっていることにすごく共感できます。葉山芸術祭でも、そういう資料とか、参考にするものがないのです。「大地の芸術祭」以降、プロがやる野外系のアートイベント、プロジェクトのマネジメント本とか、シンポジウムみたいなものは少しずつ増えていました。けれども、民間の、地域の人間、アマチュアがやっているようなものに関してはほぼない。参考にできるものとしては、一般的なNPOのマネジメントに関するものになってしまいます。文化とか、アートとかに焦点があたられたものは未だ見つけていない。

伊藤——なにをもってプロなのか、アマなのかは、区別が難しいのでなんとも言えないのですが、たとえばアートNPOリンクとか、いくつかネットワークができていて、各地で人材育成が始まっていることは事実なのですが、大学がそういうことについて目を向けてやっているというの

はありませんのですよね。多くの大学がやっているのは地域の文化施設の育成みたいな分野です。

松澤——地域には文化協会のようなお稽古や習い事の団体を支援する仕組みが昔からあります。こうした活動のマネジメントは形式化されているように思いますがそれはそれで確立している。また、プロが手がけるアートイベント・プロジェクトもこれまでの話の通りでしょう。ここで話しているようなアートプロジェクトは、そのちょうど中間というのかな。歴史も実績も経験も浅く、これからその積み重ねが地域のアートマネジメントなのでしょうね。

伊藤——これは山崎先生の方に振りたいのですが、山崎先生の授業で芹沢高志^{*2}さんを呼んだり、そういうプロジェクト型のマネジメントなどについて始めていますよね。その辺を始められたきっかけみたいなものは。

山崎稔惠——人間環境デザイン学科の科目に「デザインプロデュースの現場」というのがあります。そこでエキスパートをお招きしています。私の担当回では、アートマネジメントやアートプロジェクトに関わっている方をお呼びすることにしました。芹沢さんがふさわしいと思ったのは、アートといつても、土地の歴史や文化、地形や自然環境など、アートプロジェクトを展開していくうえでとても重要なことを押さえておられるというところです。

この学科で学生たちを見ていて常に思うのは、デザインをするということが、ただ格好いいものをつくる、というだけではないということ。デザインをする背景や意味をきちんと押さえたうえで、どういうものをつくるのかを考えないといけないと思っています。そのことを、芹沢さん

にお話ししていただきたいなと思ったのです。だから私の場合、マネジメント力アップではないのです。中身の問題ですね。なぜやるのかということです。

伊藤——そこが重要だと思うのですが、先ほど出たように、アートプロジェクトにアーティストだけでなく、建築家とか、まちづくり関係者が多いのは、基本はコミュニティデザインなのです。今のコミュニティデザインというのは、かつてのように道をつくったりというのではなくて、人間関係です。特に文化的な多様性が広がってきているなかで、いろいろな人たちの関係を再構成していく。

かつては、村のお祭りというのが、その機能を果たしていましたが、そういう共通するお祭りがなくなっていくなかで、新たに共通するお祭りをつくることで、コミュニティデザインをはかっていくという考え方方がかなりあって、芹沢さんは、その辺のプロだという感じがしましたね。第1回の人文材育成の話のときの話も、まさにそういう芹沢さんの哲学が語られていたと思うのです。

山崎——アートマネジメントということに出会ったときから、一体アートマネジメントというのはなんだろうとずっと考えていました。ちょっと口幅ったい言い方ですが、愛だと思うわけです。最近、ある学会の交流会で、ある美術館の館長が最後に挨拶されて、「アートマネジメントとは愛ですね」と締めくられて、思わず拍手してしまったのですが(笑)。

松澤——それは、どこのどなたでしょう(笑)。

山崎——愛というのは、いろいろあると思うのですけれども、気づかせるのも愛だし、思いやりを持って接するのも

愛だし、おもてなしをするのも愛だし、マネジメントの根底にあることというのは、そういうまなざしのことなのでないかと思っているのです。そうすれば、問題に直面したときにおのずと答えが出てくると思うのです。

兼子——初めに「今回の事業をやりたい」と山崎先生に相談したときに、大学を活用してやる意義というのを、山崎先生から教わったのです。ただ単にマネジメントというか、ノウハウを教えるだけの講習会をやるのだったら、大学が関わる意味はない。どうしてアートプロジェクトをやるのか。根本に立ち返った議論や講義をちゃんとすることこそ大学が関わる意義であり、その視点というかなぜやるのか、愛をちゃんと植えつけるようなプロジェクトにしたい、ということはおっしゃられましたよね。

松澤——山崎さんがおっしゃっていることも分かるけれど、私はマネジメントには、実際にどうマネジメントするかというスキル的なものも必要で、頭で考える部分と現場で現実的に使うスキルの両輪だと思っています。葉山芸術祭が20数年やってこられたのは、結果的になんとなくこのバランスが取れていたからなのだろうなと思っています。

SaMALも、葉山芸術祭でもその運営にはたくさん問題があるのですけれども、多くの問題は組織的に動いていない所、マネジメントが弱いところで発している感じがします。そういう意味でマネジメント力はやはり問われるものなのでしょう。

それがちゃんと確立されないと、先ほどの伊藤さんがおっしゃったように続かないで、一発、二発で終わってしまう。これは、民間企業も、NPOも、任意団体でも同じなの



*1 大地の芸術祭 2000年から新潟県十日町市、津南町で3年に一度開催される「大地の芸術祭」。越後妻有アートトリエンナーレ。豪雪地帯にある200世帯あまりの里山地域に国内外で活躍する現代美術作家がやってきて、作品の制作・展示、パフォーマンス、イベントなどが行われる。過疎、高齢化といった現在の日本の地方自治体の典型的な問題を抱える場所でアートフェスティバルを行ない、アーティストやボランティアといった他者が滞在、地域住民の協力しながら制作し、さらに観客がやってくることでアートプロジェクトを成立させる。空き家や廃校などが展示のスペースになるなど、芸術で地域を活性化させる試みの代表的な例。

「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」での作品、内海昭子「たくさんの失われた窓のために」(2006)
撮影=中村脩 写真提供=大地の芸術祭実行委員会



*2 芹沢高志 1951年東京生まれ。神戸大学理学部、横浜国立大学工学部建築学科卒。89年東京・四谷の東長寺のアートイベントを行うP3 art and environmentを開設。99年までは同寺地下講堂をベースに、その後は場所を特定せずに活動を展開する。国際現代アート展『デメーテル』の総合ディレクター(2002)、アサヒ・アート・フェスティバル事務局長(02-09)、横浜トリエンナーレ2005キュレーター、別府現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」総合ディレクター(09、12、15)などを務める。さいたまトリエンナーレ2016のディレクター。

写真は「芸術祭をつくる会議」での芹沢高志氏の講演風景

でしょう。5年、10年続くためには、ポイント、ポイントで押さえるべきことがあるのでしょうか。恐らく運営上の困難に陥った際に、構成メンバーが組織的に動けるか、一部の個人に頼ったままでは、結果が違うと思います。特に、お金のことにルーズになっていないかは大切な視点だと思います。私は、経営学はかじった程度でしかも、そういうものも必要なだろうなと思います。

新しい祭りの集合体

—ここで話題を変えますが、SaMALは相模湾・三浦半島のアートリンクです。この地域のなかで、芸術祭が行なわれているということについて、お話しいただけませんか？

兼子—事業計画の文章を引用すると、相模湾・三浦半島エリアは、アーティストやクリエイティブな仕事をしている人が多いエリアだということですね。作家さん、アーティストもたくさんいれば、アートに触れたいという鑑賞者もたくさんいるし、アーティストと鑑賞者を繋ぐ人たちもいる。同じ地域にそういう三者がそろっている地域として、この湘南エリア、三浦半島、相模湾、葉山、逗子、鎌倉、茅ヶ崎、大磯とか。

松澤—小田原、湯河原もそうですね。この相模湾・三浦半島地域には三者が共存している場所が多いです。東京や横浜や京都も三者共存でしょうが、広すぎてその存在がわかりにくいですね。

伊藤—別の例になりますが、いまから20年前の阪神・淡路大震災のときに調査に行って、あの阪神地域というのは特殊で、海岸沿いのエリアに地域の文化が非常に集

中しているのです。一部は神戸市であったり、西宮市であったり、大阪市であったりするのですが、その周辺は、もちろん観光での集客も重視していますが、住んでいる人たちも文化と触れているのです。

2000年以降のアートプロジェクトを見てみると、大きくふたつのパターンに分かれています、ひとつは完全なる中山間地域です。「大地の芸術祭」に代表されるような、とにかく地域が衰退しているので、観光客を呼んで、なんとか地域を元気にさせなければいけないと思って動いている。

もうひとつは、たとえば「横浜トリエンナーレ」「神戸ビエンナーレ」「あいちトリエンナーレ」などのように大都市圏です。確かに受け皿として規模が大きいだけれども、具体的に生活が見えてくるかというと、見えてこないのですよね。

たとえば“横浜”じゃなくて“関内トリエンナーレ”ならまだわかるのです。でも、横浜と言ってしまうと、400万人近い大都市ですからね。まして愛知みたいに、県の名前で言われたりしたらね。そう考えたときに、生活者が見える地域名でアートプロジェクトを考え、しかも中山間地域ではない。比較的文化的なムードもあって、住んでいる人たちが楽しんでいる、よそから人に来てもらうのが目的ではない。そういうモデルケースは、多分、関東で考えると、ここしかないのかなと感じたのですよね。私はこの辺りには、そもそも縁のない人間なのですが。

兼子—あとは、それぞれの地域が結構、個性があって、独立していて、誇りをもっていますよね。たとえば逗子と葉山はお互いに違うといって張り合っているところがあり、鎌倉もプライドをもっていますしね。

—この地域での芸術祭は、衰退している所の地域おこしのために、外から人を呼んでくるということではなくて、基本的にそこにいる人たちが、自分たちのものとしてやるイベントとしてのアートイベントなのですね。

松澤—相模湾・三浦半島のアートリンクは、その集合体ですね。

伊藤—新しい祭りですね。

山崎—自分たちがやりたいからやる、自発的に生まれたことはものすごくいいのだけれども、でも、やる人がいても、それを見る人、関心をもってくれる人がいるのか。そのところはどうなのでしょうか。

松澤—葉山芸術祭の例で言うと、結構一致していると思いますよ。企画参加の集合体ですから。地域で企画参加の集合体としてアートプロジェクトを行なうことは、やる人、見る人、関心をもってくれる人が結構ダブることになります。たとえば「中之条ビエンナーレ」*3も、「大地の芸術祭」も、単純に比較できないですが、外から表現者を招いているわけですね。基本、地域の人が表現者でやっているわけではない。地域は舞台で、やる人、見る人、関心をもってくれる人はすべて外から呼んで来るわけで、最初はかなりリスクなプロジェクトだったと思います。まあ、ふたつともそれが目的もあるプロジェクトですが。

伊藤—こういう場合に議論になってくるのが、僕は他者の目というのが必要だと思うのです。つまり、よそ者が必要だと思うのです。観光客ではなく、アーティストがよそ者として入ってきて、どういう形で地域の人たちと接点をもっていくのか。祭りで言うと、必ず「まれびと」という他の辺

境の人が来るわけですね。そういう人が入ることによって、定住民に刺激を与えていくのが祭りの原形になっているので、定住民たちだけのお祭りになってしまふと、これは文化祭になってしまふということです。だから、そういう意味でまれびとを、きちんと取り込むような、しかし、目的はそこに住んでいる人たちが楽しめる。自分たちの地域に関心をもっていくようなものでなければまずいと思います。

松澤—重要な視点だと思います。それがプロジェクトのマネジメントでシステム化しているかどうか？ 自らそういったものを取り込んでいるのか？ が、大きなポイントだと思うのです。

葉山芸術祭は先程から参加企画の集合体と申していますが、そこに実行委員会の主催企画、共催企画、協力企画というのがあって、これが伊藤さんのおっしゃる「まれびと」的機能をある程度果たしていると思います。この3つの企画関係者は通常、他地域の作家や企画者です。

葉山という地域の特徴のひとつは、地域社会に入りやすいということです。この地では「いろいろなものがあるのはオーケーだ」と感じます。たとえば、葉山芸術祭実行委員会5人のなかで、葉山生まれはひとりしかいません。恐らく、他の地域だと、我々みたいな者が企画運営するプロジェクトは、よそ者がなにを勝手なことをやっているのだとされ、トラブルの素にならかねないでしょう。葉山、逗子、相模湾・三浦半島エリアは、そういうことがあまりない、少ない地域だと思います。

—よそ者たちが寄り集まつたところで、なんらかのコミュ

*3 中之条ビエンナーレ 群馬県吾妻郡中之条町において2年に一度開催されるアートイベント。2007年に第1回が開催された。

国内外の美術作家150組が作品を発表する中之条ビエンナーレ。滞在制作する外国人作家と実行委員会、ボランティアとの交流会のようす

写真提供=中之条ビエンナーレ実行委員会
NAKANOJO BIENNALE



ニティをつくる際に、祭り的なものをジェネレートしていく必要があり、できたものなのですか？

松澤—よそ者だけではなく、元からいる人もそこに自然に入って来ますよ。私は投資の世界でサラリーマンをしていて、35のときに辞めて、葉山芸術祭に関わった当初、驚いたのは、ミーティングの席で自分の父親より上の人を相手に、結構みんな喧々諤々やっているのです。私が今まで関わった世界では、それはあり得なかった。皆さん敬意は払っているけれども、平気で反対意見も言うし、とにかく気まずい雰囲気にならず議論が成り立っているということです。他で私は見たことないです。

年齢の違い、男女の違い、教育とか、育ってきた環境の違い、もちろん葉山の地の人かどうかも含め、お互いに議論し、喧嘩になるわけではなくて、一定のところに落ち着いてくるというのは。普通はあり得ないですよね。多様性、最近の言葉で言うとダイバーシティをあまり意識せず認めている地域だということでしょうか。

—芸術祭は、自発的に自分たちが楽しむためにつくり、そこに外の人もいれば、なかの人もいる。いろいろな人が混在して、コミュニティができていくためのひとつのフォーマットという感じでしょうか。

松澤—結果的にひとつの仕組みみたいになっていっていのんですよね。先ほど伊藤さんがおっしゃられたような意味で言うと。だから、コミュニティの再生ではなくて、新生、共創みたいな感じなのかな。

バブル崩壊と3.11以降

伊藤—地域の文化行政は1970年代から始まるのですが、特に横浜、神奈川県とか、兵庫県とか、埼玉県辺りが中心なのですが、そういうところというのは60年代に人口の大移動が起こって、全国からいろいろな人たちが集まってきた地域なのです。伝統的なコミュニティは弱かつたけれども、これから先10年、20年一緒に暮らさなければいけない人たちが、何らかの形で共通項を見いだしていくために、文化行政というのが始まったのです。でも、なかなか行政主導ではうまくいかなかったので、当時はコミュニティ運動という形で、市民たちの間で公民館の中での交流をはかっていくための仕組みが随分摸索されていたのですよね。

でも、その後また流動が起つたりとか、男性はコミュニティを抜けて仕事中心になつてしまつたりというようなところで、女性たちが産直運動とか、子育ての運動のなかで交流が始まつたりという経緯はあった。文化によってもう一度、活発化というのが90年代の不況を抜けて21世紀になって始まつてきているのかな。その点、葉山はものすごく先駆的で、90年代からそれが起つてきただという点は、すごいなと思うのですよね。

山崎—葉山芸術祭は23年ですか。風物詩になっていますね。

兼子—葉山芸術祭の朝山正和さんは「オアシス」という海の家を、毎年夏の間やっている。あれも30年以上続いているそうですね。ある意味、ファミリーをつくっている。

松澤—あの海の家は私から見ると「生活協同委員会」みたいな感じですよね。協力し合いながら仕事して、楽しんで、食べている人たち。ああいうものが存在できることが葉山らしさなのだと思います。オアシスができたことより、存在できることが重要だと思います。他の地域では多分、つまはじきにされてしまいかねない。ですからオアシスをはじめとする葉山のいくつかの海の家は単なるビジネスではなく文化、地域カルチャーだと思います。

山崎—いま、求められているものはそれですよね。

松澤—そうですね。山崎さんも多分同じことを考えいらっしゃるのではないかと思いますけれども、先ほど90年の話が出たときに、いわゆるバブルが崩壊して、今日より明日が豊かだと、とりあえず、大企業に入って、まともにやっていれば、そこそこの地位までいけるとか、そういうのはなくなってしまった。だから、本質的にベクトルを変えざるを得なくなっている。幸福の意味を物、金銭、社会的地位から他に移さないと、自分がすごく不幸に感じています。

山崎—それと、やはり東日本大震災でしょうね。

松澤—それ以降は絆の問題がすごく出てきましたよね。

山崎—これは芹沢さんの言葉ですが、創造的縮小ということですね。

松澤—創造的縮小というのは、そうせざるを得なくなつてきていると思うのです。今後も続くだろうと思っています。

山崎—そこでこういったアートプロジェクト……。

松澤—アートプロジェクトに対しての魅力が、相対的に増すでしょうね。

山崎—これまで見落としていたこと、見失いそうになつたことを発見してみると。足元をきちんと見ると。アートプロジェクトはそういう気づきの機会ですね。

松澤—心の余裕がないと見えてこないとか、そういうのはあると思います。

これから成長するアートリンク会議

—ここで初年度のSaMALの活動を皆さんに振り返って頂きたいのですが。

松澤—今年度のアートリンク会議に関して言えば、本当のアートリンク会議への準備の段階を出ていません。思った以上にアートリンク会議の意味、意義を参加アートプロジェクトの皆さんに理解してもらうことが大変でした。

ただ、やっているうちに会議も変わつてきました。皆さんの希望もあって、会議の議題に毎回開催場所のアートプロジェクトからひとつテーマをあげるという案がでてきました。こういうのがでてくる雰囲気になったのは良かったなと思っています。ただ、まだまだ議論は深まっていないと思います。これからです。

兼子—まずは顔見知りになることが必要です。その点、皆さんだいぶ顔見知りになり、お互いに話ができるようになって、非常に成果が大きいと思っています。それから、アートリンク会議は、いろいろなアートプロジェクトを見て回りながら同日開催してきましたが、それによって、よそと自分の所を比較するということができたのではないかでしょうか。

松澤—黄金町バザール^{*4}のときに、ディレクターの山野眞悟さんが、他との比較、他を見ることが必要だと、いい



葉山芸術祭の「青空アート市」は地域内外の人々の交流の場として賑わう



葉山町森戸海岸で夏期に営業する「オアシス」は1981年創業の海の家。100坪程のスペースに更衣室やシャワーではなく、ライブスペースや複数の飲食ブースがあり、日替わりのライブや、建物設営、飲食提供に地域内外の多くの人が関わる。オーガニック素材にこだわるなど独特の運営ポリシーをもつ撮影=富安修一

ことを言ってくれたなと思っていました。

兼子——逗子アートフェスティバルの実行委員長の渡邊(忠貴)さんも、これは使えるとか、言いながら視察されていました。よそと比較しながら、相対化して自分たちのプロジェクトが見られるという視点が植えつけられたのは、かなり良い成果なのではないかと思います。

松澤——案外、各アートプロジェクトは、同じようなことで悩んでいるというのを知つてもらえたのでよかったです。

伊藤——そういう意味では、当初の計画でも、初年度はお互いにお互いを知るというのが目標だったので、一定の成果をあげていますので、今度の2月の合宿が楽しみですね。

兼子——お互いを知ることで、自分自身のことを見つめ直すきっかけになっているような気がしますね。問題点がなんなのかが、なんとなくわかつてきて、テーマとしてでてくるという、それだけでも良かったのではないかと思いますね。

山崎——アートリンク会議の担当は松澤さんと兼子さんのおふたりですが、そこに伊藤さんなどが加わって、このお三方がそれぞれの個性でもって、集まられた方に声をかけていかれるのです。それが私は毎回、楽しみなのです。どういうふうに集まつた人たちの声を引き出すかというの。私は回を重ねるごとに盛りあがってきたと思っていて、代表として申し上げるならば、推進委員のお三方の力が大きいのです。

伊藤——僕もほとんど黙っていて、発言しないようにしているのです。

山崎——それぞれの個性があって。松澤さんのパワフルなコンダクターぶりがすごいですよ(笑)。

松澤——皆さんに参加していただいた以上、何かを掴んでもらいたい、役に立てもらいたいという思いです。最初の頃と比べると、皆さんはしゃべるようになりましたよね。山崎——やはり参加意識がすごくてきましたね。伊藤——確実に変化しているのは、リンク会議でしょうね。

——アートマネジメントの専門家による講義「人材育成講座」についてはどうですか。

伊藤——人材育成講座は最初の5回は座学ですから、比較的どこもやっているもので、もっともわかりやすい。それぞれ講師の個性が出ていて、おもしろかったです。それをどういうふうに受け止めたかというのは、いまは見えてないので、リンク会議でその成果がでてきているのかなと僕は思いたいですね。

山崎——私は人材育成講座のときにある受講者と話したことがあります。その方は毎回、受講してくださっていて、「これまで楽しいと思ってずっとやってきたことが、講座を聞くことによって、なにをやってきたのかがよくわかり、自分のやっていることを、他の人に説明できるようになりました」と言ってくださいました。アカデミズムとは無縁の現場でやっていることを、アカデミズムのなかではどんな所に位置しているのかというようなことが理解できて、筋道を立てて話ができるようになって「とてもありがたいことです」とおっしゃってくださいました。

兼子——なんのためにアートプロジェクトをやるのかというのが自覚できるようになった。

松澤——私は、現場と知識やスキルは両輪だと思っています

す。座学で得た知識やスキルを基に、各アートプロジェクトで自分がやっていることと重ね合せて消化していくという作業を、参加者が行なってくれればよいですね。ひとつ思うのは、座学が講師からの一方通行ではなくて、もう少し参加者に発言させる仕組みが欲しいと思いました。そうした参加者の声もありました。ただ、講師にそこまで要求するのもちょっと難しいですが。

兼子——会場のメディアセンターの終わりの時間が決まつていて、最後の質問のやり取りもなかなか取れないというような、それがちょっと残念です。

——展覧会の実施を現実的にサポートする「企画実践講座」はいかがでしたか。

伊藤——本当に試行錯誤でした。時間もなかったこともあって、結局は単発のプロジェクトを支援しただけで終わってしまった。

兼子——本当はひとつの企画に、他との共同企画みたいなものにつなげていきたいのですよね。互いに学び合うような感じにしたかった。

松澤——葉山芸術祭での「Life is beautiful!」展は、自分自身も関わっています。我々がやろうと思ってやったことなので、成果はありました。プロの人たちがもっているスキルを、アマチュアであるメンバーが吸収するという点で、間違いなく成果がありました。

またそれを通じて大いにいろいろと考えさせられました。展示自体も一定の制約のもとで計画した企画を実現はできたと思います。

兼子——私もすごく勉強になりました。

松澤——この展覧会の企画の発端は、神奈川県立近代美術館の水沢勉館長が、武器をアート作品にしたものがある、と葉山芸術祭に連絡していただいたことです。そのため、企画のアドバイザーを水沢さんにお願いしました。おそらく水沢さんもいろいろな意味で勉強になったのではないかと私は感じています。

山崎——水沢さんは通常、白い箱のなかで展覧会をされている訳で、あの展覧会はオルタナティブなスペースでやつたのですからね。

松澤——しかし、企画実践講座については、今後、他の企画の人たちにも参加してもらうやり方で、もっと「見える化」しながら、やらないとならないかもしれませんね。

伊藤——もっと議論すべきでしょう。共同企画をつくるというのは、大きな成果もあると同時にリスクもあるでしょうしね。

松澤——あります。それこそ我々が「Life is beautiful!」展で、5時間、議論していたことが、共同企画にして参加人数が増えれば必要議論時間10時間とか20時間になるかもしれない、人数が増えれば

兼子——個々のプロジェクトのサポートは続けながら、できれば共同企画なり、お互いに相乗りしながらやっていく企画を考える必要はありますね。

——SaMALではアーカイブ化の取り組みも行なっていますね。

松澤——アーカイブに関しては、まずはアートプロジェクトを記録に残すことの重要性を理解してもらうことだと思います。



*4 黄金町バザール 横浜市中区黄金町エリアでNPO法人黄金町エリアマネジメントセンターが主催し、アートによる街の再生に取組むアートフェスティバル。2008年より毎年秋に開催し、国内外のアーティスト、キュレーター、建築家を招聘している。

2015年7月に行なわれたSaMALアートプロジェクト人材育成講座は黄金町バザールを見学

ます。

兼子—葉山芸術祭のHAFS^{*5}は、過去のパンフレットからデータを集めたり、それを打ち込んだりとか、非常に良いデータを揃えているので、思ったよりも良いものを今年度はつくれるのではないかと思う。

山崎—葉山には、そういう記録係もいるのですか。

松澤—今は、HAFSができたので、HAFSがやっていますが、今までちゃんと記録を録っていたかというと、過去はそうではなかったのです。

兼子—写真がたくさんあるのですが、年度となんのイベントか、紐付けができるなくて、写真が残っているというだけですね。

松澤—葉山芸術祭の場合は20年たってからその重要性に気が付きました。パンフレットは1回から3回までは、もう1部ずつぐらいしか残っていないです。そういうことをひとつ取ってみても、記録の重要性を皆さんに伝えたい。

伊藤—どこでもそうです。文化施設でも開館からの記録というのが、あるようで、ないのです。パンフレットだけは、ファイルはするようにしても、5年10年たつと、誰もまとめる気にならない。そのうちに役所だったら、7年たつと捨てられてしまう。必要性の理解がいちばん重要でしょうね。「できるのなら、やるに越したことはないけれど、そこまでやらなければいけないのかね?」というのが、多くの人たちの声ではないかと思いますね。

松澤—10年後に、後ろを振り向いたときに、なにもないと寂しい気持ちに必ずなりますよ。そして、自分たちの過去を振り返ることができないと、どう修正して、次をつくっ

ていけばいいかというのがわからないということにもなる。

それに、我々がやっているようなアートイベントの底辺の目的で重要なのは、絆とか、横の繋がりということ。そういう記録が残っていないことは、大きなマイナスだと思います。「あのとき、こうだったね、ああだったね」という証明がなくなるわけですから。写真でも、パンフレットでも、なんでも良いです。いずれはバトンタッチしていかなければいけないときに、記録が残っていないと、想像するしかなくなってしまうので。やはり自分たちの痕跡というのをきちんと残さないと、その地域の歴史に対しての責任も、果たせない、ということになると思います。

山崎—アートプロジェクトに関わる委員がもうちょっと欲しいということですか。

松澤—そうですね。その地域、地域ですね。私は学部生の時は政治学を学んだ人間です。そのためか、地域社会が、葉山芸術祭やSaMALなどによってどう変化するか興味があります。だからこそアーカイブは大事だと思います。**伊藤**—アーカイブを考えいくときに、いちばん大きな問題というのは、なにを残すかなのです。全部残すのは不可能。今までアートの世界でアーカイブというと、作品を残してきたのです。でも、たぶんアートプロジェクトは、プロセスを重視しているので、そのプロセスというのは、反応や、いろいろな人たちの声があるので、そういったものをどういう形で記録化していくのか。

それと、松澤さんが言っていたように、社会の変化です。定点観測的な手法がたぶん求められてくるのではないかと思うのです。いずれにしても、こういうアートプロジェクト

トのアーカイブのためにはなにを残すかということは、ずっと議論しながら試行錯誤するしかないと思います。

松澤—どこもそうですが、地域のアートプロジェクトというのは、たいてい拠点をもっていないです。これはプロや行政が深く関わってやっているところとの大きな違いです。記録保管する場所がないのは問題です。行政にはお金ではなく、場所の提供やアーカイブ保管の支援もできます。

伊藤—そういうのは、行政はやりません。集まったデータを、責任を持って保管するシステムを、行政はいちばん拒否するのです。預かってしまったら、責任がかかると。

—では、来年の展望をお聞かせ下さい。

山崎—2015年度の目標は、アートリンクを結成することですね。来年度は現在6つのアートプロジェクトに加えて、もう少し参加していただくプロジェクトを増やすということが、ひとつありますね。

伊藤—10ぐらいに持っていきたいですね。

山崎—あとは今年度実施した事業を継承しつつ、改めるところは改めて、レベルアップというか、質を高く、効果をあげるというのが目指すところでしょうか。

松澤—テーマに関して、参加団体の希望も聞かない。今年は、お金のことをやっていないのです。どう集めるかとか、管理するか。そして、行政の関係も。地域のアートプロジェクトだと必ずでてくる課題ですから。

兼子—以前、懇親会でお酒を飲みながら話していたのですが、朝山さんが、「5年後、10年後の先を考えないとね」

「みんなで船でも借りて」みたいな話をした。1年先、2年先もいいけれども、そんな遠い未来の夢もちょっと考えた方がいいなど、そのときに思いました。みんなで、将来像みたいなものを、参加者と一緒に話すというのが必要なのかと思います。

松澤—SaMALでやっているようなことは、通常、地域のアートプロジェクトに関わっている人たちとか、その研究者がメンバーですね。今後は、もっと異分野の方に参加してもらいたいです。

伊藤—地域型のこういうアートプロジェクトについて第3のパターンという形で研究してもらいたいですね。社会調査的なアプローチもあるでしょうし、経済学的に経済波及効果みたいなものも計算できるでしょうし。

松澤—地方自治の研究者や、統計学とか、いろいろな調査研究の分野の人に関わってもらいたいです。せっかく関東学院大学がフロントに立っているので、学内で他の分野の研究者も、ちょっと引き込んでほしいなと……。

伊藤—推進委員という形ではなく、そういう関係の一部加わってくださる先生に入って貰うべきかもしれません。

人文学部系でコミュニティを調査している人も学者もいるわけだし、そういう人たちにも加わってもらって、推進委員側だけではなく、そういう人にチェックしてもらえるようになるといいですね。

—いろいろな、お話を伺いました。本日はありがとうございました。



*5 HAFS Hayama Art Festival Studies 葉山芸術祭調査研究チームの略称。葉山芸術祭が第20回を迎えるのを機に2012年にスタート。地域発・住民主導で開催を重ねる葉山芸術祭の活動内容を、資料やヒアリング、アンケート調査を下に俯瞰的に観察、調査を行なう、葉山芸術祭実行委員会直下の専任チーム

葉山芸術祭の調査分析を行なうHAFSの発表会

アートリンク会議

第1回 2015年5月5日 開催地：葉山

葉山芸術祭ガイドツアー／「Life is beautiful!」展見学／SaMAL趣旨および事業説明／会議参加者紹介

第2回 2015年7月12日 開催地：大磯

大磯のアートと町並みガイドツアー／アートプロジェクト紹介（葉山・逗子・真鶴・大磯）

第3回 2015年9月20日 開催地：金沢文庫

金沢文庫芸術祭1DAY イベントガイドツアー／アートプロジェクト紹介（金沢文庫）

ディスカッション：テーマ「告知・広報・宣伝」

第4回 2015年10月11日 開催地：三崎

三崎開港祭ガイドツアー／アートプロジェクト紹介（三崎）

ディスカッション：テーマ「組織化」

第5回 2015年11月3日 開催地：逗子

逗子アートフェスティバル「小坪・路地展」ガイドツアー／アートプロジェクト紹介（逗子）

ディスカッション：テーマ「ボランティア」

第6回 2016年3月20日 開催地：真鶴

真鶴まちなーれガイドツアー

2015年度アートリンク総括会議

2016年2月20-21日 開催地：湘南国際村センター

アートプロジェクト人材育成講座

第1回 講師：芹沢高志「アートプロジェクトとは」

第2回 講師：吉本光宏「アートプロジェクトの背景と潮流」

第3回 講師：鈴木一郎太「プロジェクトタビリティ：プロジェクトの〈芽〉の育て方」

第4回 講師：羽原康恵「アートプロジェクトの進め方」

第5回 講師：山野真悟+上野正也「黄金町アートバザールの歩みと運営」

第6回 ワークショップ：わがまちのアートプロジェクトをデザインする❶

第7回 ワークショップ：わがまちのアートプロジェクトをデザインする❷

第8回 講師：熊倉純子「ふたたびアートプロジェクトとは」

キュレーション・企画展示実践講座

葉山芸術祭「Life is beautiful! —モザンビークとアート—」展

アドバイザー：水沢勉（神奈川県立近代美術館館長）

逗子アートフェスティバル コツボプロジェクト「小坪・路地展」「里山も爆発だ！」

アドバイザー：豊田雅子（NPO法人尾道空き家再生プロジェクト 代表理事）

紫牟田伸子（編集家 プロデューサー）・平賀 哲（写真家）

真鶴まちなーれ ArTreasure Walk

アドバイザー：朝山正和（葉山芸術祭実行委員 海の家OASISオーナー）

長井理佐（アートコミュニケーター）

SaMAL 2015 アートプロジェクト 連絡先

大磯芸術祭

<http://oisooartfes.jimdo.com/>

問い合わせ：大磯芸術祭事務局（カフェぶらっと） 電話 0463-62-0020

次回開催 → 第6回大磯芸術祭2017（予定） 日程：未定

金沢文庫芸術祭

<http://www.bunko-art.org/>

問い合わせ：金沢文庫芸術祭事務局 info@bunko-art.org 電話 045-788-9119

次回開催 → 第18回金沢文庫芸術祭 日程：2016年9月18日～11月中旬（予定）

逗子アートフェスティバル

<http://zushi-art.com/>

問い合わせ：フェスティバル実行委員会事務局（逗子市市民協働部文化スポーツ課内）

電話 046-873-1111内582 ファックス 046-873-4520

bunkasinkou@city.zushi.kanagawa.jp

次回開催 → 逗子アートフェスティバル2016（ZAF2016）

日程：2016年10月8日～11月6日、11月19日～11月27日

葉山芸術祭

<http://www.hayama-artfes.org/>

問い合わせ：葉山芸術祭実行委員会 info@hayama-artfes.org

次回開催 → 第24回葉山芸術祭 日程：2016年4月23日～5月15日

真鶴まちなーれ

<http://machinale.net/>

問い合わせ：真鶴まちなーれ事務局 info@machinale.net

次回開催 → 真鶴まちなーれ2017（仮） 日程：2017年3月（予定）

三崎開港祭

<http://misakifc.com/special/3922>

問い合わせ：三崎開港祭事務局 shiminkyodo0101@city.miura.kanagawa.jp

次回開催 → 第4回三崎開港祭 日程：2016年10月10日～10月11日

本書の無断複写（コピー）・転載は著作権法上の例外を除き、禁じられています